

愛媛大学教育学部

第139号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番

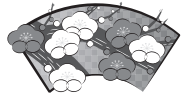
愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com

賀 春 元旦

愛媛大学教育学部同窓会役員一同



ご挨拶



愛媛大学
教育学部長

日野 克博

皆さま、新しい年がスタートしました。本年も愛媛大学教育学部を支えてくださる同窓会の皆さまに、心より感謝申し上げます。私は昨年四月より学部長を拝命しました。教育学部のさらなる発展に向けて尽力してまいります。教育学部の使命は、次世代を担う人材を育成する教員を養成することです。私のモットーは「愛のある教師を養成する」です。具体的には、愛大（あいだい）で、愛情豊かで、アイデア豊富、挨拶（愛察）のできる愛の大きな教員を意味しています。今年度の学部案内の表紙にもこの言葉が紹介されており、教員養成の根幹として重要であると考えています。

さて、教育学部を取り巻く状況は大きく変化しています。全国的な教員不足が問題視される一方で、急速な少子化により数年後に

は教員需要の低下も懸念されています。こうした状況を踏まえ、受験生の確保および教育現場のニーズに対応できる教員の養成に向けて、令和六年度入学生より、学校教育教員養成課程内のコースを再編しました。詳細は教育学部のホームページ等をご参照ください。その特徴は、サブコースのまとまりで四年間を見通した学生指導体制を強化すること、複数校種や複数教科等の教員免許状取得を推進すること、そして教育学部と教職大学院の連携を整理し、より体系的・組織的な指導体制を構築することです。より質の高い教員を養成することを目指しています。

教育学部の現状として、令和六年度については「学部・大学院の将来構想」「組織の合理化と機能強化」「カリキュラムの充実」「受験生の確保」「教員就職率の向上」「連携の強化」「職場環境の整備」の七つの課題を掲げ、特に以下の三つの取り組みを進めています。

一 地域教員希望枠を活用した教員養成改革

今年度、文部科学省の「地域教員希望枠を活用した教員養成大

学・学部の機能強化事業」に申請し、採択されました。教育学部では、人口縮小社会を見据えた地域課題に対応する「地域の人口減少加速度に対応した質の高い教員養成プログラム」を進めています。これは、高校・学部・大学院・教育委員会の連携を強化し、大学入学前から教員採用に至るまで一貫した取り組みを推進するものです。今後、「地域教員希望枠入試」や「教員養成コース等特別選考」を導入予定です。また、令和六年度より「地域創生教育プログラム」をスタートしました。この取り組みはまだ始まったばかりですが、地域課題に対応した教員養成をさらに推進していきます。

二 教職大学院を核にした教員養成の高度化

近年、教育学部卒業生だけでなく、他学部や他大学で教員免許を取得した学生が教職大学院に進学するケースが増えています。教職大学院の志願者・入学者の確保に力を入れており、全国でも高い志願率を誇るまでになりました。また、令和七年度からは全国に先駆けて、学部新卒者を対象にした「一年修了プログラム」を導入予定です。このプログラムでは、学部四年生が教職大学院の基礎科目を先取り履修し、スムーズな修了が可能になります。教育学部・教職大学院の連携を密にし、教育現場で必要とされる質の高い教員を送り出すため、教員養成の高度化を進めていきます。

三 教員就職率の向上

教員不足が叫ばれる中で、教員就職率の向上は喫緊の課題です。令和六年度には、従来の四年生対象の教員採用試験対策セミナーに加え、新たに三年生向けの試験対策支援を実施しました。その結果、愛媛県公立学校の教員採用試験の合格率は、近年で最も高い水準を記録しています。また、卒業生の離職率の問題にも対応すべく、卒業生のフォローアップを強化しています。具体的には、卒業時の担当教員が卒業生と連絡を取り合い、状況を把握するとともに、教育学部の改善に役立てています。

このように、愛媛大学教育学部では地域に根ざした教員養成を進めています。受験生や学生、保護者、教育関係者の皆さまに「愛大がいい」「愛大でよかった」と思っていただけのように、学部及び大学院の改革・運営に全力を尽くしてまいります。そのことが、愛媛大学憲章に掲げられた「地域に立脚する大学として、地域に役立つ人材、地域の発展を牽引する人材の養成」に貢献する強靱な支えとなると信じています。

私は、これからの社会と地域における教員養成の役割をしっかりと考え、「ピンチをチャンス」と捉えながら、教育学部の方向性を導いていきたいと考えています。同窓会の皆さまには、引き続き本学部の発展にお力添えをいただきますよう、心よりお願い申し上げます。

表紙

元愛大教育学部教授……菊川 國夫
「ご挨拶」……………(1)

愛媛大学教育学部長 日野 克博
心 響……………(2)

「校長先生の教え」 三好 則史
研究室紹介……………(3)

自然科学系研究室（技術教育） 玉井 輝之
職場だより……………(5)

一年を振り返って 重松 大智
四国中央市・松柏小教諭……………

少しずつ 松本 七海
今治市・乃万小教諭……………

教師一年生 村上卯咲希
松山市・北条南中教諭……………

周囲の人々に支えられて 佐々木 航
八幡浜市・千丈小教諭……………

誰一人取り残さない授業を目指して 木下翔太郎
宇和島市・城東中教諭……………

学校事務職員として 松浦 未夢
愛南町・城辺小主事……………

教育学部の今……………(11)
学部トピックス……………(12)

附小水上安全学習……………
附属特支防災学習……………
支部活動報告……………

目次

校長先生の教え

西予市立

三瓶小学校長

三好 則史

(昭六二卒)



「見上げてごらん夜の星を、小さな星の小さな光が……」先日、

歌手・坂本九さんの長女、大島花子さんの「歌とトーク」を拝聴する機会があった。その中で、「見上げてごらん夜の星を」を熱唱されたのが心に残っている。最近、健康づくりの一環として夜のウォーキングを続けているが、歌詞と重なるような、きれいな星空をしみじみと眺めながら歩くことが多い。「あれは何？」ある日、東の空にひときわ大きく、明るく輝く星が気になって調べてみた。木星であった。今まで、職業柄月や金星はよく見ていたが、木星が気になって見たのは初めてである。こんなにも大きく見えるものなのかと、新たな発見をしたような気分になった。

好奇心で更に調べてみると、火星や土星まで同じ夜空に見えることが分かった。次の日から、これが……と納得しながら眺めて歩いた。もちろん使った道具は、スマホのアプリである。新聞にも取り上げられていたが、運がいいことに、今年は土星食にも出くわすことができた。

これだと思い、全校の子供たちに話をする、何人かが興味を持ってくれたようで、夜だけでなく、早朝にも木星探しにチャレンジし、結果を報告してくれた。自分の好奇心の押し付けのようであったが、同じ感動が共有できたようで、とても嬉しかった。

さて、私も教員生活三十七年目を迎え、退職までカウントダウンである。周りには若い先生方が増え、活躍の様子を見るたびに、昔の自分を思い出すことが多くなった。私は、昭和六十三年、昭和最後の年度の採用であるため、初任者研修のない時代である。新採の年から体育主任も任されていた。当時、校長先生に、日課として命じられていたことがある。それは、学生時代には一度も目にすることのなかった「師道鑽仰の碑」の朗読である。

校長室にある出勤簿に押印をした後、そこで声を張り上げ、緊張しながら毎日読み上げた。当然、毎日のように、横で校長先生が聞かれていた。初めの一週間ほどは、読み方と意味を指導していた。き、どうにか読めるようになった。この朗読が嫌でたまらず、校長先生が出勤する前に押印を済ませようと、早い時間の出勤に努めていたのを思い出す。

ワープロがようやく世の中に出始め、文書は手書きが普通であっ

心響



た時代に、校長先生から大きな新品の「文豪」を渡された。夜遅くなんでも校長先生の文書を全て打たなくてはいけないのである。初めてのワープロでキーボードや機能を覚えながら苦労して進めた。これも、いつものように校長先生が横におられた。他にも数多くの難題を命じられてきた。今となっては懐かしい思い出であるが、現在であれば「パワハラ」と言われても仕方がないようなことばかりである。

「人ノ師タル者ハ須ク……」先生は、厳正・寛仁で広い学識を持ち、心が清らかで優れた人格を持たなければならぬ。子供を教える場合は、性格に沿い、才能に応じて、才能を十分に伸ばさなければならぬ。……人を教えるものの戒めとする。」読み終えると必ず「できよるか。」の一言と指導があった。長い時には、朝から三十分以上になることも……。

この教えは、今も自分が教師として子供たちの前に立つ時の、思いと重なる。教師として多くの経験をしてきたが、その中で夢中になりすぎて道から逸れそうになるたび、この教えを思い出すことで修正できたことが幾度となくある。

この教えを受け、子供たちの才能を伸ばすためにはどうすれば良いのだろうか、この年になっても常に考え、続けてきたことがある。

まずは実態に合わせることである。子供たちと接する中で実態をしつかりと捉え、一人一人の特性に合わせた方法を考えてきた。次に、楽しいことである。楽しくなくては夢中になることはできない。まず自分でやってみて、自分が共に楽しめるように活動の内容や進め方を工夫してきた。自分が楽しめて初めてそれを上手に伝えることができると思うのである。

最後は、子供の好奇心をくすぐることである。子供の答えに、「なんで？」と聞き返すことが口癖のようになっている。子供自身をやってみたい、知りたい、なんだろうと思える指導に努めてきた。

我々教師の自分の一番の仕事は子供たちの才能を伸ばすことである。子供たちの前に立つ以上、山路先生の教えを今も常に戒めとしている。

こう思えるのも、まさに校長先生の教えのおかげである。校長先生には感謝の言葉しかない。

・同窓会懇親会報告	17
ホームカミングデー	18
大学祭アラカルト	19
サポーター制度報告	20
サークル紹介	21
ボランティアサークルすくすく	22
会員の声	23
・「未来の子どもたちへ愛よ届け」	24
・「大拙・英訳「教行信証」の研究(一)	25
表紙の作品	26
先輩を偲ぶ	27
「あしあと」先輩たちのあしあと	28
同窓会からのお知らせ	29
敬弔・寄付者名・放送大学	30
裏表紙	31
会員写真館	



研究室紹介

自然科学系研究室（技術教育）



准教授 玉井 輝之 先生

技術教育の動向

人工知能（AI）、データサイエンス、ICT機器の活用、STEAM教育、プログラミングなど、近年は技術教育に関する概念が急速に進展しています。教育現場の革新だけでなく、次世代人材育成においても影響が広がっています。私が着任した二〇一八年度には存在していなかった授業が位置付けられています。一回生の授業科目に「教育におけるICT機器の活用」に関する必修科目が増え、教職大学院の授業科目に先端ICT機器の活用や教育DXに関する科目が開講されています。これらの取り組みは、現代課題に向き合うことのできる教員を育成するための重要なステップです。



教育学部 Web ページ

学生の実践的な学び

学部生は、二回生で母校の小学

校・中学校に観察実習をする機会があります。この実習は、教職体験実習「ふるさと実習」という名称で実施されています。ガイダンスは大学一回生の間に行われ、学生たちが楽しみにしている声が数多く聞かれます。これまでも多くの学生を温かく受け入れてくださった関係者の皆様には、心より感謝申し上げます。九月上旬に五日間の実習を終えた二回生は、振り返りとしてのリフレクシオン活動で充実した日々を思い出し、学生同士で教員の魅力を共有することができています。また、二〇二三年度からは、四回生が教職大学院の授業科目を受講することができるようになりました。



教育学部 Instagram

内だけにとどまらず、教育現場や地域との連携を深める活動がますます増えています。

同窓会生との連携と地域とのつながり

近年、教員採用試験の採用数が増えており、若手教員が増えています。そのような中で、教科内容をさらに深く学ぶ機会として、「教材研究フォローアップ講座」を開講しています。この講座は、若手教員のスキルアップを目標にした研修ですが、管理職や指導主事を務める先生方も参加してくださいます。大学主催の研修ということもあり、参加者と相談しながら研修内容を進めるため、穏やかな雰囲気の中で学ぶ機会を提供できています。教員としてのスキルアップはもちろんですが、近況報告の話題で盛り上がるなど、参加者同士のコミュニケーションを深める場にもなっています。各教科で講座は開講しているため、「久しぶり」に大学の先生に会いに行こうという気軽な気持ちで参加していただけると嬉しく思います。

中学校技術科の教員採用試験では、実技試験があります。これまでに、実技試験の練習で技術室を利用した学生が何名かいます。私たちの知らないところで様々な形で学生を支援し、温かく見守っていただいていることに感謝申し上げます。



現職教員との年末合同研修会

地域連携を進めることで、同窓会生と一緒にプロジェクトを進める機会も多くありますので私が参加している事業を紹介します。まず、学校と地域住民等が力を合わせて教育を進める、「コミスクえひめ」の活動です。この活動に大學生も参加することがあります。学生は、教員ではない立場の社会人と協働し、ワークショップを行うことで、学校教育の枠を超えた授業の可能性を体験的に学んでいます。また、愛媛県総合教育センターや愛媛文教会館などの教育施設を訪問する機会にもなり、愛媛を支える施設を深く知る良い機会となっています。次に、理科や数学あるいは科学技術といった分野

の実験や工作を一同に集めて来場者が楽しめる「青少年のための科学の祭典」です。このイベントは、二〇二三年度から愛媛大学教育学部を会場に開催されるようになります。教育学部の教職ストリートを活用して開放的な空間で活動することができています。こうした活動を通して、同窓会生と愛媛大学についての話題にあがるのは、普段、大学生が過ごしている施設とは異なる以前の大学の施設やその状況についてです。同窓会生は新しい施設に対する感動や大学生の生活の変化に関する発見の言葉を多くいただきます。大学生にとっては、当たり前で過ごしている施設と過去の状況との違いに驚くことが多いようです。地域の方々に教育学部に足を運んでいただく機会が増えることで、大学生も多くの気づきや学びを得ることができます。同窓会生の皆様も、機会がありましたらぜひ教育学部に来ていただけると幸いです。

海外派遣事業

大学進学の魅力の一つに、留学を通じて広い世界に触れられることがあります。教育学部の教員が主体として運営しているプロゲ



青少年のための科学の祭典

ラムでは、事前指導や教員の引率があるため、安心して参加できるサポート体制が整っています。さらに、オンライン交流が普及したこと、事前に現地の情報を詳しく収集しやすくなり、現地での交流の質も高まっています。私がいままで関わった研修を紹介します。まずは、「UWB研修」です。この研修は、二週間程度の期間をアメリカのシアトルで過ごし、ワークショップ型の活動を通して、ワシントン大学バセル校やワシントン大学の学生と交流を深めます。現地では、ダイバーシティの理解・尊重を目的として、研修や学校訪問を行いグローバルな視点を養うことができます。滞在中は、ホームステイを体験し、異文

化に触れながら長期留学に向けてのステップアップができます。高校生と一緒に授業に参加することや、小学校の授業を参観することで、日本の教育との違いを実感し、教育に関する視野を広げることができています。次に「フィリピン教育実習」です。この実習は一週間程度の期間をフィリピンのマニラを中心に過ごすプログラムです。この実習では、フィリピン大学附属学校の先生が事前学習や現地のサポートにも関わってくださっています。主に授業の観察をするグループと、フィリピンの児童・生徒に授業をするグループに分かれ、それぞれの目的に応じたスキルアップを目指します。教育学部の海外派遣事業は、学生たちが異文化を理解し、教育への考えを深める貴重な機会を提供してい



フィリピン教育実習

ます。これらの経験を通じて、学生たちは未来の教育を担う教員として成長するための第一歩を踏み出しています。留学を通じて得られる新しい視点と学びが、多くの学生にとって大きな財産になることを願っています。

技術教育の伝統

ここまでは、教育学部の近年の変化や新しい取り組みについて述べてきました。一方で、同窓会の皆様の時代から受け継がれてきた技術教育の伝統も、今なお教育現場で息づいています。例えば、工作機械として、旋盤や昇降盤、道具としてドラフターやレンチなどメンテナンスを重ねながら何十年と使用しています。教育の骨格をなす部分は変わらず引き継いでいます。技術教育の分野は変化が激しい一方で、その基盤となる「ものづくり」の精神は変わりません。これまで積み重ねられてきた伝統を受け継ぎながら、私たち教員も日々学び、新しい技術を取り入れつつ教育現場を支えています。同窓会の皆様と共に、これからも未来の教育を形作っていければと思っています。

おわりに

教育学部の学生たちは、教員になるためのスキルを磨くだけでなく、大学生としてしかできない多様な経験や学びを通じて成長しています。これらの活動が実現しているのは、同窓会の皆様の温かいご支援があつてこそです。皆様のご協力により、学生たちの活動は年々充実し、より深い学びを得られる場が広がっていることを、大変嬉しく思っています。これからも学生たちが未来の教育を担う教員として羽ばたいていけるよう、どうぞ変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

皆様の益々のご活躍をお祈りするとともに、教育学部のさらなる発展を目指して、ともに歩んでいければ幸いです。本当にありがとうございます。



UWB研修

職場だより

一年を振り返って



四国中央市
松柏小教諭
重松 大智
(令六卒)

四月一日、始業式前の朝。私の中には不安しかなかった。これからいよいよ自分の担当する学級の児童と対面する。どんな子たちなんだろう。授業は上手くいくだろうか。何から話そう。次々と浮かぶ不安や疑問を考えすぎて、緊張で頭が真っ白になっていた。しかし、いざ学級が発表され子どもと対面したとたん、不安はなくなった。子どもたちは興味津々といった顔でこちらを見ている。その表情を見たら、「これから一年間この子たちと一緒に過ごしていくん

だ」という気持ちが湧き上がり、楽しみで胸がいっぱいになった。そのとき、教師としての新たな挑戦が始まるという実感とともに、前向きな気持ちが生まれた。

そんなわくわくした気持ちで始まった教員生活だが、正直最初の三か月は苦しくて仕方がなかった。授業が思うように進まないことが多く、子どもたちにどう向き合えばよいのかということにも戸惑いがあった。教師という仕事は授業だけでなく、生徒指導や校内の事務作業など、様々な業務がありその膨大な仕事量をこなさなければその仕事量に圧倒される日々が続いた。これまでに経験したことのない責任の重さを感じると同時に、先輩教員たちの助けがなければ乗り越えられなかった場面も数

多くあった。何度も「自分はこの仕事に向いてないのではないか」と思う日々が続いた。

そんな中、ある授業がきっかけで私の気持ちが大きく変わった。それは図画工作の授業だった。紙コップや割りばしなど身近なものを絵具と組み合わせ、いろいろな模様を作るという授業で、教科書を事前に読み、スーパーで使えそうなものを買ってそろえて授業準備を頑張った。そのかいがあつて、子どもたちはとても楽しそうに活動をしており、教室は笑顔であふれていた。すると、一人の子どもが「僕らのためにこの材料準備してくれたん？ここまでしてくれるん、嬉しい。」と目を輝かせながら声を掛けてきた。この言葉を聞いたとき、「教師のやりがいってこれだな」と感じた。子どもの笑顔や感謝の言葉に触れたことで、この仕事がいかに人の成長を支えるものかを改めて実感した。もち

ろん大変な仕事であることには変わりない。しかし、この仕事ほど、人が成長していく様子を間近で見れる職業はないと、誇りをもてるようになった。

また、時間が経つにつれ、少しずつ教職になれ、楽しみなことも増えた。特に印象に残っているのは十二月に行われた駅伝大会。体をあまり動かしていなかったのが方々や他の教員たちと一緒に走ることで、絆が深まった。優勝を狙っていたものの、二位という結果に終わり悔しい思いをしたが、その経験を通じて新たなチャレンジ精神が芽生え、ランニングへの興味が湧いた。最近では、毎週金曜日に仕事終わりにランニングチームに参加し、仲間とともに走る時間を楽しむようになった。ランニングは仕事のストレスを解消するだけでなく、自分自身の体力づくりにも役立っており、新たな生活習

慣として大切にしている。

この一年を振り返ると、教師としても、そして一人の人間としても、大きく成長したと感じている。もちろん、まだまだ学ぶことは多く、課題もたくさんあるが、子どもたちとともに成長する喜びを感じることができた一年であった。最初は不安だらけだった私だが、今では自分の役割に自信を持ち、これからも子どもと一緒に成長していきたいという気持ちが強くなった。

これからも、子どもたちの成長を支えつつ、自身も教師として成長していくために、日々の仕事に真摯に向き合い続けたいと思う。最初の不安や戸惑いがあったからこそ、今こうして前向きに仕事に取り組めていることに感謝し、この先も教師という職業に誇りを持ちながら歩んでいきたい。

少しずつ



今治市
乃万小教諭
松本 七海
(令六卒)

私は小学校低学年の頃から友達に勉強を教えるのが好きで、漠然と「先生になりたいな」と考えていました。小学六年生の時には、些細なことにも気付き、子どもたちのことをよく見てくれる担任の先生と出会い、教師という職業に憧れました。そしてその夢をかなえるために、愛媛大学教育学部小学校サブコースに進学しました。しかし、進学と同時に新型コロナウイルスが流行し、大学での講義はすべてオンラインになってしまいました。慣れないパソコンでのオンライン講義や、一人で受けなければならぬという孤独感があり、不安でいっぱい的一年間を過ごしました。しかし、この一年間で様々なアプリやソフトを使い果た。オンライン講義でも、これらの実践を通してICTを用いた授業の工夫や、ロイロノートの活

用法を知ることができました。今でも、この時に学んだことを参考にすることもあり、この一年間は私にとって大きなものになっています。二回生以降も、授業を構成するときは必ずICTを用いたものにして、デジタル教材開発の講義に参加したりするなど、今までパソコンが使えなかった私でも、大学での学びによって大きく変化することができました。四回生になってから本格的に教員採用試験の勉強を始め、何度も心が折れましたが、その度に先生方や仲間が支えてくれました。今回の採用試験から面接のお題が大きく変わるなど、焦って対策することもありましたが、無事に合格することができ、今年度から今治市立乃万小学校で勤務することになりました。

四月一日になるまでは、ついに教師になれる！というワクワクと、これからどんな生活が始まるんだろうという不安がありました。働き始めて一週間は子どもたちと会わずに準備等をしていましたが、まず驚いたのは事務作業の多さです。教育実習では、基本的

に「授業」しか観察をしていないし、実践も「授業」のみでした。放課後も、自分の研究授業の準備をしていただけだったため、教師の授業以外の仕事について触れたことはありませんでした。実際は、子どもたちのテキストに名前を書いたり、必要な書類をまとめたり、想像以上に作業することが多くありました。それによって教材研究もあまり進まず、不安に感じながら新学期を迎えました。とにかく一日のことをするので精一杯で、正直自分が理想としていた学級開きを行うこともできませんでした。しかし、初めて会った時から子どもたちは温かく、素直な気持ちで私と関わってくれました。私

が手紙を配るのを忘れていたり、私の確認不足で急に予定が変更になったりしても、「もう、先生何してんのー！」と明るく振る舞ってくれる子どもたちには感謝しかありません。

私がこの仕事をしていて楽しいと思うことは、子どもたち、そして自分自身の成長を感じられることです。子どもたちは一学期の間でも、もちろん大きな成長を見せ

てくれましたが、一ヶ月、いや一日の中でも成長を見せてくれる時があります。例えば、朝から騒がしくしていて授業に集中できなかった時には、なぜ静かにしなければならぬのか、迷惑に思っている友達がいることを考えているか、などをクラスの中で話し合いました。毎日毎日当たり前のようにある授業時間を子どもたちの中で思い返し、自分がどう行動すべきなのかを一生懸命考え、共有することで、その後の授業は静かに行うことができました。もちろん、教師に言われて自分の行動を変えることも大切だと思いますが、自分たちの頭で考えて、友達と意見を交換することさらに自分事として問題を捉え、実践に移せたのだと思います。ただ頭ごなしに「静かにしなさい」と怒っても、何の意味もなかったんだと気づき、子どもたちの成長と同時に私自身も、子どもたちの思いを変えられることができた、という喜びを感じられて、少し自信を持つきっかけにもなりました。他にもICTに関して、子どもたちに大きな成長がありました。四月の初めに

はタブレットをほとんど使えなかった子どもたちが、一学期が終わる頃にはロイロノートやタイピングアプリを使いこなし、とても速いスピードで文字を打つことができています。私も追いつけられないように、タブレットを使って授業をしたり、子どもたちが興味を持てるコンテンツを探したりしながらパソコンスキルを高めようとしているのですが、子どもたちの吸収力は凄まじく、日々感心しています。このような毎日の小さな成長とその発見が、私の原動力になっています。

つらいことももちろんありますが、周りの先生方の支えのおかげで楽しく毎日を過ごすことができています。私が大学生の時から考えていた理想の教師にはまだまだなれておらず、学級開きや運動会など年に一回しかないタイミングを逃して、これやりたかったのに！と思うことしかないのですが、自分のペースで少しずつ、できることを増やしていきたいと思っています。

教師一年生



松山市

北条南中教諭

村上卯咲希

(令六卒)



私が教師を志したのは、中学校二年生のころです。当時の担任の先生との出会いがきっかけでした。それまでは、絵を描くことが好きだったため、漫画家を目指していました。しかし、思春期に入ったこともあり、他の人の絵と自分の絵を比べてしまい、自分の実力に自信をなくしてしまいました。そんな中、いつも私たちに寄り添い、導いてくれる担任の先生の姿に感銘を受け、漫画家ではなく、自分の得意を活かすことができる教師の道に進むことを選びました。中学生だったころの当時の先生方の多くが、愛媛大学教育学部を卒業されたことから、私も愛媛大学教育学部へ進学しました。

愛媛大学での日々はとても充実したものでした。入学当初は、新型コロナウイルス感染症の影響により遠隔授業がほとんどで、大学の人と直接関わるのがほとんどありませんでした。次第に対面授

業が再開され、共に教師を志す仲間と話す機会も増えていきました。特に、同じ美術専攻の仲間、先輩、後輩、大学の先生方との思い出はかけがえのないものです。教育実習での授業づくりに困ったとき、教員採用試験に不安になったとき、作品づくりに息詰まったとき、さまざまな場面で美術専攻の仲間を支えられてきました。

愛媛大学を卒業後は、松山市立北条南中学校で勤務することになりました。自分がこれから勤務する学校がわかった瞬間、中学生から目指していた教師としての日々が始まる期待感と、仕事を上手く遂行することができると不安な気持ちで胸がいっぱいでした。そして迎えた四月、私は一年生の担任と、全校三学年分の美術の担当になりました。北条南中学校にやってきたばかりで、さらに教師一年目の自分が、新しく中学校に入ってくる生徒たちを受け持つことができるのかという気持ちと、いきなり三学年全ての生徒に美術を指導することができののだろうかという不安で押しつぶされそうになりました。そんなときに心の支えとなったのが、同じ学校の同僚の先生方でした。右も左もわからな

い私に、学級経営や入学式までにしておく良いことを丁寧に教えていただきました。しかし、学級経営も授業も最初から上手いききませんでした。学級経営においては、自分の伝えたいことが生徒に上手く伝わらないことや、気持ちに余裕がなく生徒の行動や発言にしっかりと目を向けることができないことばかりでした。授業においては、生徒の実態把握が不十分であり、作品制作において個に応じた指導をすることができませんでした。

自分の指導力・授業力不足を痛感する毎日、生徒に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。教師一年目の最初から全て上手くいくことはないかとわかっていても、生徒からしたら年数など関係ありません。この現状を打開するために、私は二つのことを心がけました。まず一つ目は、先輩の先生方から積極的にアドバイスをいただくことです。私は毎日がいっぱいっばいで、悩みを一人で抱え込みがちになっていました。そのため、上手いかない学級経営の何から改善すれば良いのかわからず、自分の指導力不足に落ち込む日々でした。このまま抱え込んでいても、現状は何も変わらない



と思い、自分よりもたくさんの経験をされてきた先輩の先生方にアドバイスをいただくようにしました。最初は生徒への話し方、話の聞かせ方、規律の作り方が大切だと教わり、実践に活かしていきました。すると、次第にですが、学級経営に頭を悩ますことが減っていききました。また、教科の授業づくりでも、他校の美術の先生とお話する機会があった際に、題材についてアドバイスをいただいたり、テストの作り方など教えていただいたりしました。特に教科の方は、学校で私一人しかいないため、自分から動いて情報を得にくくこの大切さを実感しました。

二つ目は、失敗をそのままにせず、次に活かすことです。学級経営に

においても、教科の授業においても、上手くいっただことは今のところほとんどありません。しかし、その失敗をそのままにするのではなく、何かしら行動を起こして改善に活かすことを心がけました。特に美術の授業で、生徒から思うような反応が返ってこないこと、作品作りが難しそうな様子が見受けられた場合は、すぐに授業の流れや指導の手立てを見直すようにしました。すると、個別指導にける時間を増やし、生徒一人一人としっかりと向き合うことができるようになりました。

この一年で、たくさんの貴重な経験を積むことができたと感じます。今の自分があるのは、これまでに支えてくださった同僚の先生方、保護者の方々、家族、友人、そして何より生徒のおかげです。担任の生徒は中学校一年生、私は教師一年生として、たくさんの出来事を通して成長することができました。まだまだ教師として未熟ですが、私が憧れた担任の先生のように、これからも生徒とぐんぐん成長していきたいです。

周囲の人々に支えられて



八幡浜市
千丈小教諭
佐々木 航
(令五卒)

「愛媛県で教員として働きたい」という志を抱き、愛媛大学の門をくぐったのが二〇二〇年四月。大

学で受けられる専門性の高い教育やサークル活動、一人暮らしやアルバイトなど、これまでに体験したことのない出来事に心躍らせていた我々を待っていたのは、新型コロナウイルスという世界的な疫病であった。二〇一九年の年末から確認された新型コロナウイルスは、二〇二〇年になって全世界に流行、日本でも緊急事態宣言が出される事態となった。結果、入学式は中止となり、大学での活動も著しく制限されてしまった。

どうすることもできない事情により、想像していた「華の大学生活」を送ることはできなかったわけだが、外出を自粛しオンラインで授業を受けていた期間が全くの無駄だったとは思わない。このコミュニケーションが希薄な期間が

あったからこそ、一つひとつのつながりを大切にしようとする意識や、制限の中で何とか試行錯誤しようとする姿勢が身に付いた。また、コンピューターに触れる機会が増えたことで、現在の教育現場で整備されているGIGAスクール構想の環境に比較的スムーズに慣れることができた。まさにけがの功名である。

二回生の後半からは規制が緩和され、通常の大学生活が戻ってきた。三回生の時に行われた教育実習もコロナ以前の形態に戻り、愛媛大学附属小学校で一か月間、子どもたちを相手に「教師」として向き合った。実習中の一か月は、正直に言って辛くしんどい経験も多かったが、子どもと触れ合う喜びや仲間と共に物事に取り組みむ良さを学ぶことができた。

そして三回生の後期から、卒業研究と同時進行で、教員採用試験の勉強が始まった。ここでも、共に学ぶ仲間の存在が励みになった。お互いの進捗状況に刺激を受け合い、少ししんどくなった時は支え合った。また、ゼミや進路指導の先生方にも熱心にご指導いただいたお陰で、卒業研究も教員採用試験も無事乗り越えることがで

きた。

さて、教員採用試験で、今でも覚えていることがある。二次試験の面接で、一通りのやり取りを終えた後、面接官の方から「これは合否には一切関係ないが、赴任先の希望はあるか」と尋ねられた。事前の面接指導では、なるべく「どこでもいいです」と答えるように指導されていたのだが、どうせ働くのなら慣れ親しんだ南予、更に言うなら地元の八幡浜がよかった。そのため、「どこでもよいが、あえて言うなら地元の南予や八幡浜に恩返しをしたい」という返答をしたことを今でも覚えている。このような返答をしたからか、希望通りに八幡浜市内にある千丈小学校に赴任することができた。



千丈小学校の児童は、挨拶の声が大きく、いつも元気いっぱいである。また、授業や行事に真面目に取り組み、全員で物事に関わろうとする姿勢が身に付いている。これは、彼らが生来持っている資質に加え、家庭や地域での教育と、これまでに千丈小学校の学校教育に携わってきた先生方の努力の結晶であると思う。そしてこれから、自分もその活動の輪に加わるのだ。ただ喜ばしいだけでなく、責任重大である。恥ずかしいことだが、初めて子どもたちの前に立つ四月のこの段階で、ようやく教員としての自覚が芽生えてきた。

それでも心が折れなかったのは、周りの先生方に支えていただいたお陰である。それぞれの校務で忙しい中、分らないことを尋ねても嫌な顔一つせず、丁寧に教えていただいた。管理職の先生方も、普段は優しく見守っていただき、ふとしたタイミングで声を掛けていただいた。近すぎず遠すぎずの絶妙な距離感で関わっていたため、不自由を感じることなく校務に取り組むことができた。先輩の先生方には、感謝の気持ちでいっぱいである。

この原稿を書いているのが二〇二四年の十一月だから、教員になってから半年以上が経過したことになる。まだまだ苦しいこともあるが、四月に比べると少しは教員らしくなったと思う。また、今担任している二年生と共に過ごす期間も、もう残り少なくなってきた。これから子どもたちと積極的に関わり、良い状態で次の学年にバトンを渡すことができるようにしたい。そして、支えてくれる周囲の方々への感謝の気持ちを忘れず、その恩を返すことができるよう、教員として日々成長していきたい。

誰一人取り残さない 授業を目指して



宇和島市
城東中教諭
木下翔太郎
(令二卒)



初任者の頃は、黒板の前で滝のような汗をかきながら授業をしていた。きつと自分に自信が持てなかったからだと思う。答えにくい発問をして生まれる沈黙は地獄のようだった。

国語科教員になってから、もう五年が経とうとしている。まだまだうまくいかないことが多く冷や汗をかくことばかりだが、以前よりは自分の授業に自信が持てるようになった。今の目標は、「できるだけ一人も取り残さない授業をする。」ということだ。多くの先生方の授業を見せていただいたり、助言をいただいたりする中で、その実現に向けたヒントを得ることができた。今回は、その中で実践している三つを書きたい。

まず一つ目に意識しているのは、導入の五分をこだわるということだ。私は授業の導入の五分間に何を話すかをメモに書き出すようにしている。(実際、全授業書き出すのはさすがに身が持たないので週のうちの二、三コマだけ書くようにしている。) いざ五分間の話す内容を書き起こしてみると、自分の話には無駄が多いということが明らかになってくる。そこから無駄を省いて、分かりにくい言葉を変えて、必要な情報を付け加えて……としていると、すっきりとした文章になってくる。その導入で授業を始めていくと、以前よりもテンポがよくなったように思う。授業の中でリズムが生まれ、自信を持って笑顔で振る舞えるようになった。導入がうまくいくと、その一コマで生徒が居眠りすることはほとんどない。行き当たりばったりではなく、最初の準備をして授業に臨むだけでこんなにも変わるのかということを実感できたため、今後も続けていきたいと思っている。

二つ目に意識しているのは、丸付けを授業に組み込むということだ。授業では、投げ掛けた問いの答えをノートに書かせ、書けた生徒から教卓の前にいる自分のところへ持ってこさせるようにしている。問いは皆が解けるような簡単なものを用意し、難しいものは解ける人だけ取り組ませている。そうすれば、全員が一度は必ずノートを持って丸付けを受けに来ることができ。中学生が皆の前で丸付けをされて、うれしいのだろうか……と疑問に思うときもあったが、いざやってみると、生徒はとても生き生きとした表情で発問に向き合ってくれるようになった。教卓の前に丸付けの列ができ始めると、友達よりも早く解きたいと思うのだろうか、競い合って一生懸命問題に向き合う生徒が増えた。また、大きな丸を付けて返すとすぐに、解けなかった問題に挑戦しようとする姿が見られた。さらに、丸付けによって教師に認められたという思いを持ち、授業中に手を挙げて発表する生徒も増えたように思う。丸付けに少々時間はかかるが、国語に苦手意識を持つ生徒も前向きに学習に取り組める方法だと感じている。



三つ目に意識しているのは、とにかく褒めるということだ。私は授業にとっても意欲的な生徒や、対にあまり意欲的でない生徒にばかり意識が向いてしまいがちなのだが、ある先生に「その間にいる生徒をたくさん褒めてあげて」という助言をいただいた。確かに言われてみれば、私は中間層の生徒を褒める機会が極端に少なかった。授業でなかなか手を挙げられない生徒にもチャレンジさせる機会を用意し、答えられたときにはとにかく褒めるようにしてみた。褒める機会をたくさんつくる授業にしたら、生徒が笑顔で聞いてくれるようになったと思う。褒められる環境をつくっていくことで、生徒が安心して授業を受けられるようになったと感じる。

以上、三つのことを意識しながら授業を組み立てている。今も「うまくいった」と感じられる授業ができることは多くないが、この意識を続けていけば、きつと今の授業をさらによくしていけると信じている。

教材研究は時間がかかるし、考え出したらきりが無い。正直しんどいと思うときもあるが、自分も生徒も一生懸命な瞬間が授業で生まれると、つい楽しくなってしまう。少しでも自分の授業で「国語が好きだ」という生徒が増えるように、これからも汗水を流しながら全力で授業を行っていききたい。

学校事務職員として



愛南町
城辺小主事
松浦 未夢
(令六卒)



「社会には貧困や障がいなどが原因で、自分の望んだ教育が受けられない子どもたちが数多くいる。」

これは愛媛大学教育学部の学生だった私が、ある講義を通して知った事実です。この事実を知った時、私は衝撃を受けました。そして、そうした子どもたちが、自分の望んだ教育を望んだ場所で受けることができるように、就学援助をしたり、学校のバリアフリー化を進めたりしたいと思うようになり、学校事務職員を目指すようになりました。その後、愛媛大学教育学部を卒業し、早いもので学校事務職員として働き始めてから一年が経とうとしています。そこで今回は、学校事務職員としての一年間を振り返りながら、学校事務職員の実際について皆様に紹介したいと思います。

まずは、私の勤務先である愛南町立城辺小学校と城辺共同学校事務室について紹介します。

第一に、愛南町立城辺小学校は、「みんなはひとりのためにひとり友達や仲間を大切にできる子どもたちが数多くいます。また、挨拶を大切にしており、毎朝多くの六年生が正面玄関に立ち、自主的に挨拶運動を行っています。さらに、地域とのつながりが強固であることも城辺小学校の特徴であると思います。毎朝の登校は必ず地域の方々が見守っており、校門まで地域の方が付いてきてくださることもあります。」

第二に、城辺共同学校事務室は五人の学校事務職員で構成されており、五人で拠点校である城辺小学校を含めた全七校の小中学校に關係する事務処理を進めています。基本的には拠点校である城辺小学校内にある事務室にあり、そこで業務を進めています。週に一回は複数人で手分けして城辺小学校以外の六校を訪問し、各学校に実際に足を運ばなければできない事務処理を行ったり、各学校の

校長先生や先生方とコミュニケーションを取ったりしています。

次に、学校事務職員の仕事内容について紹介します。今回は、文書受付、町会計関係事務、旅費請求関係事務の三つの業務を取り上げたいと思います。

一つ目の文書受付とは、学校に届くメールや文書を受け付け、回覧するという業務です。学校に届く文書には、イベントのチラシなど、多くの人に見てもらうことを目的としたものもあれば、個人情報や記された特定の人にしか見せてはいけないものもあります。こうした各文書の違いに気を付けながら、適切に各文書を取り扱うようにしています。

二つ目の町会計関係事務とは、簡単に言えば、学校に必要な消耗品等を購入し、その消耗品の代金の支払いを町に請求するという業務です。町から各学校に配分される予算には限りがあるため、予算内で学校に必要な消耗品等を購入することができるよう、先生方と相談しながら業務を進めています。

三つ目の旅費請求関係事務と

は、先生方が県内外に出張に行った際の旅費を県に請求する業務です。先生方から提出していただく出張伺を基に「旅費システム」を活用して出張申請を行い、出張後には出張報告を行うことで、適切な金額が先生方に支払われるように事務処理を行っています。

続いて、学校事務職員の喜びについて紹介します。私は日々、様々な場面で、学校事務職員としての喜びを感じています。例えば、自分の購入した消耗品が学校のあらゆる場所・場面で活用されているのを見ると、非常にうれしい気持ちになります。また、これは数か月前の出来事なのですが、私はある先生の県外出張申請において、研修会場までの経路を検索・確定させたり、旅行業者にホテル・公共交通機関の手配を依頼したりと、慣れない事務処理に少々疲労を感じていました。しかし、県外出張の前日、その先生から「ありがとう。本当にお世話になりました。行ってきます。」と言っていたとき、その瞬間に全ての疲れが吹き飛び、頑張つてよかったと心から思いました。まだまだ新米学

校事務職員である私にできることは限られていますが、私の行った業務が子どもたちと先生方の役に立っているという事実が私の喜びとなっています。

最後に、私が学校事務職員として働いていく上で大切にしていることを紹介します。それは、子どもたちの学校生活に積極的に関わっていくことです。具体的には、毎朝の挨拶運動には必ず参加し、たくさん子どもたちと挨拶を交わしています。また、毎日の給食準備にも携わり、食缶の運搬、配膳等の手伝いを行っています。その他にも、運動会や水泳競技大会、陸上競技大会などの行事にも積極的に参加し、子どもたちが頑張っている姿を目に焼き付けています。私は城辺共同学校事務室の「事務職員」であると同時に、城辺小学校の「教職員」でもあります。その自覚を胸に、子どもたちとの関わりを大切にしながら、今後も学校事務職員として成長していきたいと思っています。

2024年度から教育学部が新しくなりました！

変わったポイント

point1

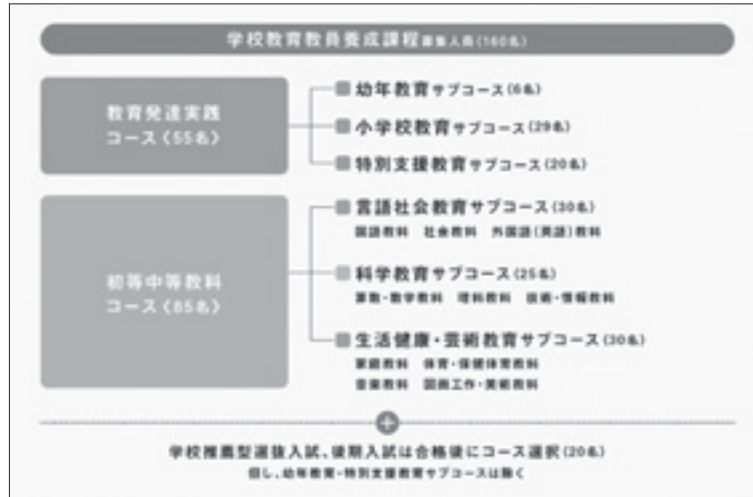
複数の免許状をもつことで、学校間の接続や教科等の横断的な視点から多様性や連続性に対応した指導のできる先生を目指します！

point2

1年次から4年次まで同じサブコースの仲間と共に学び合い、チームワークで現代の教育課題に立ち向かえる先生を目指します。

教育学部は、1 課程 2 コース 6 サブコース

教育学部は学校教員養成課程に教育発達実践コースと初等中等教科コースの2コース、6つのサブコースを設けています。初等中等教科コースでは、3つのサブコースの中に各教科があります。



取得免許状について

コース	サブコース(教科)	必修免許状(いずれか一つの教科)
教育発達実践コース	幼年教育サブコース	幼稚園教諭一種、小学校教諭一種
	小学校教育サブコース	小学校教諭一種
	特別支援教育サブコース	特別支援学校教諭一種(知、知、知、病) 小学校教諭一種もしくは中学校教諭一種(国、数、英)*
初等中等教科コース	言語社会教育サブコース	小学校教諭一種、中学校教諭二種(国、社、英)* もしくは 小学校教諭二種、中学校教諭一種(国、社、英)*
	科学教育サブコース	小学校教諭一種、中学校教諭二種(数、理、技)* もしくは 小学校教諭二種、中学校教諭一種(数、理、技)*
	生活健康・芸術教育サブコース	小学校教諭一種、中学校教諭二種(家、保体、音、美)* もしくは 小学校教諭二種、中学校教諭一種(家、保体、音、美)*



卒業の要件以外の単位を併せて修得することによって取得することができる教育職員免許状

幼稚園教諭(一種・二種)免許状、小学校教諭(一種・二種)免許状
中学校教諭(一種・二種)免許状(国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術、家庭、英語)
高等学校教諭一種免許状(国語、地理歴史、公民、数学、理科、音楽、美術、保健体育、家庭、情報、工業、英語)
特別支援学校教諭一種免許状(知・肢・病)・二種免許状(知・肢)

その他資格取得のためのプログラム

保育士養成コース

幼年教育サブコース、小学校教育サブコース、特別支援教育サブコース(小学校主専)の学生で保育士養成コース(定員12名)への推薦が認められた学生は、所定の単位を修得することで、卒業時に保育士資格を取得することができます。

学校図書館司書教諭資格取得プログラム

本学部では、文部科学省令(学校図書館司書教諭選定規程)に規定された講習科目を開講しており、単位を修得後、大学を通じて文部科学省に申請することにより、講習の修了証書が授けられます。

連携教職課程(情報)

西園の国立大学が連携して「連携教職課程」を開講しています。
愛媛大学では、高等学校教諭一種(情報)の免許状が取得可能です。

教育学部の今



学部トピックス

令和六年七月十八日(木)、愛媛大学教育学部附属小学校において、水上安全法短期講習(命を守る着衣泳講習会)を実施しました。

この講習会は、こどもを水の事故から守るという観点から、日本赤十字社愛媛県支部の協力のもと実施され、附属小学校の四年生約九十人が参加しました。

はじめに、日本赤十字社の指導員から、昨年度夏期(七月～八月)における全国の水難事故発生件数及び水難事故発生時の状況(入水時及び着衣状態の時に事故が発生するケースが多いこと等)について説明がありました。

続いて、入水方法(入水前に心臓に負担をかけない形で体に水をつける順番及び岸辺に手をつけたまま水深を確認する方法等)の説明及びデモンストレーションが行われた後、子どもたちも着衣のままプールに入り、対面のプールサイドまで歩いて横断する体験をしました。

その後、指導員から、本講習最大のミッションである「あわてずに、浮いて、救助を待つ」技術を身に付けるために、背浮き(水面で仰向けになり、体に力を入れず

に四肢を大の字に開き、顔を出す姿勢)の習得が重要であること及び水難時に背浮きの姿勢を取るべき理由(人間が真水に入った際、人体のうち、水面に浮かぶのは全体の二%だけであり、水難時はその二%を顔面に集中させることが重要となるため)について説明があり、子どもたちは三グループに分かれて二～三人ずつバディを組み、指導員のアドバイスのもと背浮きの技術を教わり、一分間の背浮きテストにチャレンジしてミッションを達成していました。また、空のペットボトルを胸元に抱いた状態(ラッコのポーズ)での背浮き体験も並行して行いました。

この他にも、スポーツシューズ、クーラーボックス、ランドセル等も浮き輪代わりになること、水辺で遊ぶ場合はライフジャケットを着用すること、水辺で溺れている人を目撃した場合は周囲の人に助けを求めること、消防等に通報すること及び浮き輪代わりになり得るものを投げ込むこと等が重要である旨指導員から説明があり、夏休みを目前にした子どもたちは、水難に関する様々な知識や技術を学んでいました。

愛媛大学教育学部附属小学校で
水上安全法短期講習を実施しました

愛媛大学HPより



子どもたちが水深を確認している様子



日本赤十字社職員による説明の様子



空のペットボトルを使用した背浮きの練習の様子



1分間の背浮きチャレンジの様子

令和六年九月三日(火)、愛媛大学教育学部附属特別支援学校において「防災・減災プログラム体験」(防災講座)を実施しました。

この体験は、日常的な備えの重要性や、被災後に自身や家族、身の回りの人の命を守るための手段や道具の使い方等を学ぶことを目的として、日本赤十字社愛媛県支部の協力のもと実施され、附属特別支援学校高等部の生徒二十二人及び教員、教育実習生十六人の計三十八人が参加しました。

当日は、職員室、会議室及び調理室をそれぞれ「避難所」「救命救急室」「炊き出し場」に見立て、日本赤十字社職員による指導のもと、生徒たちは各種体験に挑みました。

避難所ブースでは、段ボール製の簡易ベッド及び簡易トイレの組み立てに意欲的に取り組み、組み立て後は実際の寝心地や座り心地等を確認しました。

救命救急室ブースでは、日本赤十字社で実際に使用されている救護服を着用し、心臓マッサージやAED(自動体外式除細動器)の使用等に真剣に取り組みました。

調理室ブースでは、電気、ガス、水道等の各種ライフラインが全て途絶したという設定のもと、ハイゼックス袋(耐熱性の高いポリエチレン製の袋)及びカセットコンロを使用して米飯を炊き出し、生徒たちが持参したレトルトカレーや缶詰等の非常食をその日の昼食としました。

また、発電機の使い方や、事前に展示されていた救護物資や過去の災害時の様子を記録したパネル等を見学するなど、生徒たちは貴重な体験をしました。

附属特別支援学校では、今回のような活動を継続的に実施し、子どもたちの防災・減災の意識を高めてまいります。



愛媛大学教育学部附属特別支援学校で「防災・減災プログラム体験」を実施しました

愛媛大学HPより



簡易ベッドを組み立てる様子



救護服を着用して心臓マッサージの訓練を行う様子



ハイゼックス袋を使用して米飯を炊き出す様子



日本赤十字社職員による事前説明の様子

支部活動報告

附属支部

夏フェス in 附小 2024

附属小学校では、文化祭を行わない方針となった一方で、子どもたちから「もっといろいろなイベントを体験したい」という強い要望が寄せられていました。この声に応える形で、教職員や後援会が主体となり、今回のイベントを企画しました。本事業では、子どもたちの願いを叶えることを第一の目的とし、さらにコロナ禍によって経験が不足している子どもたちに、新たな学びや喜びを提供することを目指しました。また、この機会を通じて、子どもたちが自主的・実践的に活動する力を養い、主体性を伸ばすことにも重点を置いています。

イベント当日は、附属小学校の教室や廊下等を活用し、各所にブースを設置しました。教職員やPTA、後援会が協力して夏にぴったりのゲームやアクティビティを企画し、子どもたちは友達や兄弟姉妹と一緒に様々な催しを楽しむ姿が見られました。射的や輪投げ、くじ引きといったおなじみのゲームだけでなく、創意工夫を凝らした新しい企画もあり、参加者たちは時間いっぱい熱中していました。久しぶりの大規模なイベントに、子どもたちは目を輝かせ、笑顔を絶やさずに活動していました。

コロナ禍で行事が制限され、学校での活動が減少していた子どもたちにとって、このイベントは非常に貴重な体験となりました。日常では得られない刺激や体験が豊富にあり、新しい発見をしたり、これからの学校生活に役立てたいと感じたりする様子も見受けられました。一方で、予想を上回る参加者が集まったことで、ブースの混雑や回りきれない子どもが出るなど、いくつかの課題も明らかになりました。今後はブースの数を増やす、時間配分を工夫するなどの改善策を検討する必要があります。

それでも、参加した子どもたちは概ね満足した様子で、楽しい思い出を作ることができました。今回のイベントは、子どもたちにとって新鮮で意義のある経験となり、学校生活の新たな活力となる一歩を提供できたと考えています。



教育学部創立七十五周年記念
第十九回教育学部同窓会

懇親会報告

理事



越智 政英
(平六卒)

令和六年八月二十五日(日)、愛媛大学生協バルトにおいて、「教育学部創立七十五周年記念第十九回教育学部同窓会懇親会」が行われました。今回は、コロナ禍明けで二回の中止を経ての開催になりました。

受付時には、出席された方々が久しぶりの再会に笑顔で喜び合う姿が見られました。学部七十五周年の今年は、懇親会場を学内にし、希望する方には、開始前に現在の教育学部の施設を案内して回り、内部の様子を見学していただきました。すっかり新しくなった校舎と、ご自身の記憶の中の校舎を思い比べ、時代の移り変わりを実感されていました。

会場となった二階の食堂は、SDGsの取組のために、やや照明

を落としたムーディーな雰囲気です。開始時刻が近づくにつれ、各テーブルの席が次々に埋まっています。どの参加者も笑顔で声が弾み、この日を楽しみにされていたことが伝わってきました。

ついに開会です。会に先んじて、前回(二〇一八年)の懇親会から今日までの物故会員に黙祷を捧げました。

はじめに、高橋治郎会長から、開会の挨拶がありました。六年ぶりの懇親会開催を喜ぶとともに、同窓会のこれまでと今後に向けて、課題を明確にし取り組んでいく決意を述べました。

続いて、ご来賓の仁科弘重学長、日野克博教育学部長から、お祝いの言葉とともに、愛媛大学並びに大学創立七十五周年を迎えた教育学部の現状について、説明がありました。教育学部では、従来の教員養成としての役割に加えて、時代のニーズに合わせた様々な取組が行われており、入口の入学以前の段階から出口の卒業後のサポート等まで、より広範囲に渡って大学が愛媛の教育に貢献しようと取

り組んでいることについてのお話がありました。

その後、愛媛大学邦楽部による記念演奏を行いました。現役の学生による琴、三味線、尺八の三種類の和楽器の合奏で、ジブリ作品でおなじみの曲「カントリーロード」【いつも何度でも】が演奏され、会場全体がやわらかな音色に包み込まれて、心地よい雰囲気を楽しめました。

いよいよ開宴です。よく冷えた飲み物を手に、奥定一孝先生の掛け声に合わせて乾杯をした後は、皆さん一斉に好きな料理を取りに行きます。大学生協特製の、にぎり寿司、立派な鯛の塩焼きの周囲に置かれたそうめん、チキンや野菜、果物等各種の豪華な料理や、ビール、日本酒、焼酎、ジュース等の飲み物がたくさん用意されていました。好みの料理をつつきながら、近くの席やなじみの顔のいる席で、お互いに近況を報告しあったり、昔話に花を咲かせたりして、賑やかに懇親会は進んでいきました。また、世代の異なる人同士でも、それぞれの過ごしてき

た環境の違いに驚いたり感心したりしながら、交流を深める姿が見られました。

一通り話が弾んだ頃合いを見計らって、有志によるアピールタイムを行いました。我こそはという同窓生が前に集合し、同学年や同じ課程の仲間、各支部からなど、年長から現役まで、息の合ったアピールを披露して皆さんから盛大な拍手をもらっていました。

また、お楽しみ抽選会も行われました。景品には、大学で開発されたカレー、ビール等や附属特別支援学校の生徒が作業班で作った木工品、布製品等、大学にゆかりのある商品が準備されています。選ばれたくじの番号が次々と読み上げられると、当選した人は喜びながら景品を受け取りに行き、まだ当たっていない人は自分の番号が呼ばれるのを心待ちにしながら耳をすましていました。残った料理をしつかり味わい、お腹も気持ちも満足した中で、ついに最後の学歌斉唱です。指揮は愛媛大学応援団OBの矢野副会長、伴奏は、記念演奏に引き続

き、邦楽部の皆さんにお願いしました。様々な思いを胸に、皆さんで声を合わせて三番まで学歌を歌い上げました。

楽しかった場も、いよいよ閉会です。それぞれまたの再会を誓い合いながら、会場を後にしていきました。

今回、コロナ禍からようやく日常生活を取り戻し、再びこの同窓会懇親会を以前のように開催できたことに喜びを感じるとともに、今後の会のさらなる活性化についても考えていく必要性を感じました。これからは、この会が、退職された方、現職の方、ベテラン、ルーキー等に関わらず、同じ愛媛大学教育学部の卒業生として、同窓生同士で集まる婆になるとともに、世代を超えて交流を深めていくためのよい機会になるように、いろいろ工夫して呼びかけを行い、参加者が広がっていくように考えていきたいです。

(附属特別支援学校勤務)



生協パルト

第19回愛媛大学教育学部懇親会写真集



会場入口



受 付



会長挨拶



学長挨拶



黙 祷



邦楽部演奏



学部長挨拶

懇親会の様子



エール



学歌斉唱



再会を約束して

第15回

愛媛大学ホームカミングデイ

令和6年11月9日(土)、城北キャンパスにおいて「第15回愛媛大学ホームカミングデイ」が開催されました。ホームカミングデイは、卒業生の皆様や退職された教職員の方々と本学にお迎えし、本学の施設や学生祭の見学及び在校生や教職員との交流などを通して、母校への理解を深めることを目的としています。



【式典の様子】



書道パフォーマンス

式典は、教育学部卒業生の合田みゆき元アナウンサーの進行によって進められました。はじめに、オープニングセレモニーとして、愛媛大学書道部による書道パフォーマンスが行われ、「縁」をテーマに6名の部員が力強い作品を披露してくれました。

続いて、仁科弘重学長から開会の挨拶をいただいた後、新型コロナウイルス感染症の影響で、全員が参加した形での卒業式が行えなかった令和元年度及び令和2年度卒業生を対象とした卒業式イベントが開かれました。

仁科学長から記念品が贈呈された後、八尋秀典理事・副学長から祝辞が披露され、最後に、卒業生代表の森本悠暉さん（令和元年度卒）と河野莉奈さん（令和2年度卒）から、卒業生代表の言葉をいただきました。

その後、各年度ごとに壇上で記念撮影を行い、卒業式イベントを終えました。



講演される岡特任教授

恒例の特別講演は、医学部附属病院睡眠医療センター長の岡靖哲特任教授が「睡りのサイエンス」と題して、睡眠のメカニズム等について講演されました。

1日の3分の1を占める睡眠の大切さについて改めて考え直す良い機会となりました。講演後は、フロアからの質問にも分かりやすくお答えいただきました。



続いて、愛媛大学基金感謝状贈呈が行われ、昨年度、愛媛大学基金に多大なご芳志を提供いただいた方のうち、代表の4人の方に学長から感謝状をお贈りしました。その後、愛媛大学合唱団による合唱コンサートで2曲披露し、最後に合唱団と会場の皆様で学歌斉唱を行いました。

後半は大学生協食堂1階に場所を移し、懇親会を開催しました。はじめに、高橋祐二校友会会長よりご挨拶をいただいた後、「えみかビール」で乾杯し、立席形式で懇親を深めました。会場では愛媛大学南予水産研究センター及び愛南漁協のご協力により「媛スマ」の刺身が振る舞われ、「全身トロ」と言われる味を堪能しました。また、恒例の大抽選会も開かれ、番号を呼ばれる度に参加者は一喜一憂して盛会のうちにホームカミングデイを終えました。



愛媛大学合唱団による合唱コンサート



懇親会風景

(愛媛大学HPより抜粋)
一部事務局作成

令和6年度第74回愛媛大学学生祭

アラカルト

令和6年度の学生祭は、11月9日(土)・11月10日(日)の両日に「再生」をテーマに開催されました。今年は、構内全般を使ったためバザーブースの数が増え、コロナ禍以前の学生祭に近い盛況ぶりでした。さらに、今話題のキッチンカーの数も増え、学生祭を盛り上げていました。

正門では、例年と同じに第74回愛媛大学学生祭と書かれた黄色のアーチと実行委員会手作りの看板が迎えてくれました。

アーチをくぐって中に入ると、多くの人が行き交い、その上学生たちの呼び込みの声が響渡ってバザーの熱い熱気が伝わってきました。

以下、その様子を紹介いたします。



南加会館横及び法文学部棟前の様子



芝広場及びグリーンホール横・工学部横の様子



教育学部棟（本館前～2・3・4号館）付近の様子



バザーブースは、定番のたこ焼きや焼きそば・おでん・うどんに加え、クレープやピザなど最近のトレンド商品を販売する所も多くあり、来場者は思い思いの物を購入していました。また、食べ物関係ばかりではなく、来場者自身が作品を作る体験コーナーや日々の取り組みを発表するサークルもあり、至る所で学生たちの工夫が感じられました。

コロナ禍で学生祭ができなかった時期があり、サークルによっては学生祭のノウハウ継承がとぎれたため参加を断念したサークルもあると聞き及んでいます。コロナ禍を乗り越えた経験を元に新しい学生祭に進化して欲しいと願っています。

教育学部サポーター制度による特別講演会報告

特別講演会 演題 「絵本から学ぶコミュニケーション」

絵本を読むってどういうこと？ 絵本を読んでもらうってどういうこと？

講師 アナウンサー・ナレーター 福井 一恵 氏（平成8院）

令和6年11月14日(木)教育学部大講義室において、アナウンサー・ナレーターでアナウンスハウス松山合同会社代表社員の福井一恵さんによる特別講演会「絵本から学ぶコミュニケーション」があり、学生他約70人が受講しました。

講演会は、教育学部理科教育教授向平和先生の進行で進められ、はじめに日野克博教育学部長から、会の趣旨を含めたご挨拶と講師の紹介をいただきました。

この特別講演会は、同窓生・卒業生を中心に、教育学部サポーターに登録いただき、教職はもとより多方面からいろいろな支援をしていただく「愛媛大学教育学部サポーター制度」の取組みの一環として平成21年から実施しており、今回で21回目になります。

講師の福井一恵さんは、平成6年3月特別教科音楽教員養成課程を、平成8年3月大学院教育学研究科をそれぞれ卒業・修了されました。アナウンスの道に進まれて、NHK局員、フリーアナウンサーを経て、現在は松山市に拠点を置き、アナウンサー・ナレーターとして活躍されておられます。

講演は、絵本の読み聞かせの実演と、受講者同士の話し合いなどを取り入れたワークショップ的な形式で進められました。以下、講演について、講師のお話を適宜紹介しながら概要を報告します。

1【絵本1（読み聞かせ）】 身振りや手振りを入れながらみんなで歌って読もう

「しあわせなら てをたたこう」（D.A.カーター 大日本絵画）

【ワーク1 グループで自己紹介】

はじめに、福井さんのリードのもと、絵本「しあわせなら てをたたこう」を全員で歌い読みました。参加型の絵本ということでした。続いて、グループ（4～6人）で「しあわせなとき」をお題とした自己紹介をしました。アイスブレイキングとなり緊張もほぐれ、和やかな雰囲気での講演は進みました。



講師 福井一恵さん

2【絵本2（読み聞かせ）】 絵本の感想を共有し、同じことや異なることがあることを知ろう。

「ぐるんぱのようちえん」（西内ミナミ さく、堀内誠一絵 福音館書店）

【ワーク2 グループで感想の交流】

2冊目の絵本は、主人公の象が群れから出て様々な仕事を体験し、最後に子どもたちのための幼稚園をひらくというお話でした。グループで感想を交流したのち、福井さんから次のようなお話がありました。



読み聞かせをする福井さん

本：「ぐるんぱのようちえん」（西内ミナミさく、堀内誠一絵 福音館書店）

福井 今、読み聞かせを同じように同じ空間で聞きましたね。感想は同じでしたか。違ったこともありましたね。絵本を大人に読むと、そういうことが起こります。

私は、読み聞かせを聞いて「キャリアアップの話だな。すべては無駄にはならないんだ。だって最後全部生かされてるんだ」と思いました。私自身が人生非常に回り道をしています。そもそも愛媛大学教育学部に入ったら愛媛の教員にはなれるよって言われてたのに、なれませんでした。ちょうど本当に子どもが減る時期。学校での音楽の授業数も減り、採用数がグッと減った時期の採用試験、もう私だけじゃなくて同級生もなかなか受からない時代でした。

なので、私は、回り道しようと思いました。いくつか一般企業も受けて通ったのがNHKの松山放送局だったので、縁あって、ずっとアナウンサーの仕事をしています。松山局を出てフリーになり、東京でニュースアナウンサーをしていたのですが、30代半ばぐらいに全部やめて愛媛に戻ってきました。その時に絵本と出会ったんですね。松山放送局で仕事をさせてもらいながら、途中農業研修生、盲学校の講師、大学の非常勤講師などあらゆる仕事をしました。そして、今会社を起こしてアナウンスの仕事をしています。学校に行き教える仕事もしています。こうやって講演の仕事もしています。教育学部に入って教員になるために学んだことってというのは全く無駄になっていないんです。



グループで感想の交流をしましょう

読み聞かせを聞いて「人生無駄はない」って思ったのが私。でも、みんなそう思うだろうと思ったらそうじゃないんですね。（中略）

絵本ってすごく物語がシンプルなんです。象が働きに出るなんて、実際ありえないですよね。でも、絵本だからそんな無茶な設定を受け入れられるし、お話もすごくシンプルだから、あんまり余計なことを考えなくていい。なので、大人が絵本に何をしてもいいかという、自分を投影するんですね。「（主人公には）顧客目線が足りません」という経営者もいました。「中間管理職が」と言っていた人は、やっぱり中間管理職的な役割、リーダー的な役割をしている人だったとか。その時の自分とか、気になっていることとか、自分の何かを投影するって言われています。



先生方も感想を話し合いました

ただ、投影は、子どもはなかなかしないことなんですね。子どもに絵本を読んだとき、子どもにしか言えない一言があります。何でしょうか。そう「もう一回」「おーしまい」「もう一回、もう一回」。あれ、何だと思いますか。遊園地でジェットコースターに乗ったときの「もう一回乗りたい」と同じで、「もう一回、あのお話聞きたい」なんですって。子どもは絵本を体験しにきているって言われています。

大人は、絵本は1回体験したら結構もういいので、体験プラス投影になります。だから、大人が絵本を読むといろんな感想が出ます。いろんな感想が出るからこそ、ぜひみなさんと感想を共有していただきたいのです。みなさん気づかれたと思いますが、私が同じように言葉で読み聞かせをしても、ものの見方とかお話の受け取り方とか、それぞれ違いましたよね。これは普段のコミュニケーションでものすごく起こっています。明確なお話でこれですから。普段のコミュニケーションでは、思いを伝えている方もこんなにはっきりとしたストーリーは伝えられてないでしょうし、何が言いたいのか分らないまま話が始まっていたりします。ということは、思いを受け取る方では、どうなるか怖いんですよね。プラスの話をしているのにマイナスに受け取られていることとかがあるのですよ。

3【絵本3（紹介のみ）】 絵本は誰がどうして買うのだろう。

「だるまさんが」かがくいひろし さく ブロンズ新社

3冊めは、「だるまさんが……、○○」というフレーズが繰り返し出てくる楽しい絵本でした。タイミングよくページをひらいて笑顔を誘う福井さんの絵本の紹介に、会場がひきこまれていました。このあと、絵本が売れる理由、誰がどうして買うのか、コミュニケーションの視点も踏まえてお話がありました。

福井 この「だるまさんが」は大人気で、2008年の初版から今までに376万部売れています。

これは、ストーリーのない赤ちゃん絵本です。ブックファーストと言って、赤ちゃんが生まれた家庭に自治体の本をプレゼントするという事業に赤ちゃん絵本を選ぶ自治体も多くて、急激に普及してきたのです。

この「だるまさんが」は、高知県にある絵本専門店のココ・サンの言い方を借りさせてもらって、「いないいない、ばあ」方式でできていて、赤ちゃんがとっても喜ぶ方式と言われています。親子や保育園でこの本の読み聞かせを体験していると、手元に何もなくても「だ・る・ま・さ・ん・が、ほっぺちゅー」とか「だ・る・ま・さ・ん・が、お手手パッチン」とか、オリジナルの「だるまさんが遊び」ができるんですね。それは、その親子に絵本を通した共通のコミュニケーション体験があるからできることなんです。このように共通の体験をするツールとしての絵本は、とても便利に使えます。つまり、コミュニケーションでは、共通の何かがきっかけになりやすいということじゃないでしょうか。

さて、絵本には、何百万部も売れているものがあります。これは誰が買うのでしょうか。子どもではなく、親とかおじいちゃん、おばあちゃんなどの大人が買います。「ああこの本ね、うちの子が読んで、すごく大好きだったのよね。だからあの子にもあげようかしら」「あ、この絵本ね、うちの子が大好きだったんだよね。だから孫にも買ってあげよう」って買いますよね。中身を知ってるからこそ売れるんですよ。ベストセラーとかロングセラーだったら安心するんです。面白くて子どもが喜ぶこと間違いないからどんどん売れるんですよ。（中略）

絵本を買うのは大人です。子どもとのコミュニケーションツールとしても、自分の価値観の洗い出しとしても、絵本って本当に楽しいと思うので、ロングセラー以外の新刊絵本も見かけたらぜひ買って蔵書を増やしてください。絵本応援団からのお願いです。

4【絵本4（読み聞かせ）】 いろいろな絵本があることを知ろう

「どうぐ」（加古里子（かこ・さとし）ぶん、え 瑞雲舎）

4冊目は、これまでとは異なって説明的な文章によって書かれた「どうぐ」という絵本の読み聞かせでした。読み聞かせを聞きながら、子どものころに絵本や図鑑を通して新しいことを知ったときの喜びと高揚感が、よみがえってくるようでした。絵本には物語だけでなくいろいろな内容や形式があることのよさや面白さを教えていただきました。

福井 物語の絵本と違うのが分かりますか。ありえないものと、全部現実のもの。はっきり分類の定義があるわけではないけど、この作品のようにすべて事実をかいてある絵本のことを、科学絵本とも言います。この絵、分かりますか、これ本当に全部腕時計の部品を一個一個全部描いてあるそうです。この少し昔のエンジンだけで走るシンプルな自動車も、車の部品は全部描かれているそうです。物語じゃないけど、何だかひきこまれる。絵本ってひきこまれるんですよ。

あと例えば、「しあわせなら てをたたこう」のように、みんなに参加してもらえる絵本を参加型の絵本とかコミュニケーション絵本とも言います。物語も分けるとしたら、動物が擬人化された絵本などのようにグループを組むことができますね。

ほかにも、仕掛け絵本や、写真で展開する写真絵本、桃太郎とか力太郎とかの名作絵本、落語絵本などもあります。絵本というと、子どものものとかバカバカしいとか思わずに、みなさんの心に響いたり、絵が好きとかお話が好きとか、これは何か使えるとかいろいろあると思うので、ぜひぜひ手にとって見ていただけたらと思います。そうやって大人が絵本を買って読んでいくと、子どもたちに伝わりやすいので、ぜひそうして欲しいと思います。

5【絵本5（読み聞かせ）】 失敗したときどうするか、絵本を通して考えよう

「とこやにいったらいおん」（サトシン作 おくはらゆめ絵 教育画劇）

【ワーク3】 グループで、失敗したときどうするか話し合う

5冊目は、くしゃみをした勢いでお客のらいおんのタテガミを間違えて切ってしまい困った床屋のカエルが、ある

方策でその場を切り抜けるという、面白い絵本でした。物語をもとにして失敗したときにどうするかグループで話し合いました。様々な見方、考え方があり、多様な視点に気付きました。

福井 ここに登場する床屋のカエルさんで、ヘックションでやらかしちゃったんですね。どうリカバリーしようかという時、カエルさんはペンキを買いに行ったらトラに仕立て上げるっていう技を繰り出しました。皆さんならどうしますか。もし自分がカエルならって考えてもいいですし、そういえば最近こんな失敗しちゃったんだけどね、こんな風にリカバリーしたよっていうようなことを思い出してもらっていいですか。失敗したなと思った時、私はどうするんだろうって、メモに書いてもらって、グループ内でシェアをしてください。

6【ワーク4】 読み聞かせの仕方を学ぼう

続いて、自分たちが読み聞かせをする立場に立ったときの方法について、その一端を教えてくださいました。どうすれば伝わるかを聞き手の立場になって考え、準備・工夫していくことが大切であるか、知ることができました。

福井 では、失敗をしてもいいので、皆さんに少し読み聞かせをやってもらいたいと思います。

ちょっとかっこよいみんなに聞いてもらえる絵本の読み方を話します。皆さんこれから学校の先生になる方が多いと思いますが、絵本って本当に使えます。目の前の子どもを、人をどれだけ惹きつけられるか。これは学校教員になってからもすごく応用できることだと思います。

工夫があります。まず絵本なので、持ち方。右手で持ちますか？左手で持ちますか？縦書きと横書きで開き方が違います。絵本の前を手が横切ると集中力が切れるので、手が縁を横切らないようにします。後ろは自分の手がブックエンドになったようにまっすぐ持ちます。自分の方から向こうにめくっていきます。端っこをとり、親指を後ろ側で滑らせてまん中まで進め、「すーっ、ペロン」とやるといいです。結構絵本って重いので、ちゃんと下で支えてやって、向こうにめくりに行くっていうのがおすすめです。

このようなテクニックは、教室の前でみんなに読み聞かせをするとか、何人か集めてグループで読むときに、絵本の邪魔をしない、子どもたちの集中力を邪魔しない、グーッと惹きつけるためのコツのひとつです。グループに読む時には、やはり集中してもらいたいので、工夫と準備が必要です。

準備として、私は、絵本のカバーと帯があると滑りますので外しておきます。または、見せたあと読む前に外します。新しい本では、挟まっているハガキなどを取っておく、優しく開いて開き癖をつけてやることをします。

私が、とっても大事にしていることがあって、本編と固い表紙をくっつけている「見返し」という部分をとばさないこと。絵本一冊一冊違います。絵本作家さんたちはここにも思いを込めています。物語の始まりの前奏だと思ってちゃんと見せてあげる。最後、本文が終わって、この最後の見返しも見せてあげる。意外と飛ばしがちな背景紙も、ここで物語が完結していたり、サブストーリーが展開されていたりしますので、しっかり見せてあげてください。



絵本はこのように後ろでしっかり支えて持ちます

本：「わたしと なかよし」(ナンシー・カールソン作
ながわちひろ訳 瑞雲舎)

7【絵本6（読み聞かせ）】 私のベースになっている絵本

「メロディ だいすきなわたしのピアノ」(くすのきしげのり作、佐竹美保絵 YAMAHA)

最後に読まれた6冊目の絵本は、福井さんご自身の選ばれた一冊でした。時の流れを越えて固く結ばれた一台のピアノと女の子との絆をえがいた、心温まるお話です。コミュニケーションの大切さ、人と人との縁と絆など、福井さんの熱い思いが受講者の心に響きました。

福井 最後の一冊。これが私を本当に表している一冊で、愛媛大学に来て学んで本当に良かったなと思える、私のベースになっている物語だと思ってます。私はこの絵本で、音楽を学んでよかったなと心から思いました。

絵本って、これをきっかけにお話もできるし、一人一人の感じ方や価値観が違うってことも分かる。シンプルなほんとに短いお話でもすごくいろんなものが詰まっていて、私たちのコミュニケーションについて教えてくれるツールの一つだなと思うんですね。

私は音楽を学んだものの、今、直接音楽を活かす仕事をしていません。でも、音楽をしていたあの日々は思い出すし、音楽と一緒に学んだ仲間が今もつながっていて、教員はしてないけど、音楽教員の仲間たちがたくさんいて、今でも助けてくれます。「ああ、きっと私がやってきたことって、音楽を通したコミュニケーションだったんだ」って思っているんです。コミュニケーションのツールって、しゃべり方だけじゃないと思うんですよ。もちろんしゃべることもコミュニケーションだけど、音楽だったり絵本だったり、好きな何かだったり絶対コミュニケーションのツールになる。絵本の中にもコミュニケーションのヒントはたくさんあるし、音楽の中にもあるし、皆さんの専門の中にもコミュニケーションのツールとなるもの、深まるものはたくさんあると思うので、ぜひそれを活かして、楽しい人生を、豊かな人生を送ってください。ありがとうございました。

心に染み入るような福井さんの読み聞かせと、ご自身の豊かな人生経験に基づくお話に、90分の講演があつという間に過ぎていきました。担当の向教授から、教育・教材の視点や、実践的な読み聞かせ方、そして投影の話やキャリアのことなど、学生のために素晴らしいお話をいただいたことへの謝辞があり、拍手で特別講演を終了しました。

講演を通して、コミュニケーションが人間形成に資する重要性や教育活動における実践のあり方について、読み聞かせを体験しながら楽しく学び、深く考えることができました。お話からうかがうことのできた福井さんの歩まれてきた道と自他への思い、人生を切り拓いていくポジティブな姿勢とエネルギーは、受講した後輩たちの将来にきっと活かされることと考えます。充実した学びの時間になりました。

なお、報告の中で、読み聞かせいただいた絵本については、内容の紹介を最小限にとどめるよう努めました。同窓会員の皆様には、どうか実物の絵本を手にとられてお読みいただけましたら幸いです。(報告：事務局 矢野)

サークル紹介

ボランティアサークル

“ずくずく”

〈サークル紹介〉

私たち、愛媛大学ボランティアサークルずくずくは、一年生二十七人、二年生十五人、三年生九人、四年生四人の計五十五人で活動しています。ずくずくは愛媛県を中心に開催されるボランティアに参加したり、部員同士で交流をする部会という活動を行ったりしています。いずれの活動も強制参加ではないため、部員たちは学業やアルバイトとも両立して活動しています。昨年から新型コロナウイルスの影響も少なくなり、活動の幅を徐々に増やして、部員の数も年々増えており、サークルとしての規模も大きくなりつつあります。学年男女問わずみんな仲良く活動しており、ボランティア参加の制限もございませんので、少しでも興味をもたれた方はお気軽にご連絡下さい。

〈活動状況〉

ずくずくは、様々なボランティア活動に参加しています。今回はその中から二つ紹介させていただきます。一つ目は、STTの審判やボールパーソンです。まず、S



TTとはサウンドテーブルテニスの略称です。サウンドテーブルテニスは、視覚に障がいのある方が楽しむことができるスポーツです。このスポーツは、音を利用してプレイするため、通常のテーブルテニスとは異なるルールや用具が用いられます。一番の大きな違いとしては、ボールと打ち方です。音を聞いてプレイするため、ボールの中には金属の小さな球が入っており、転がすと音が鳴るようになっています。また、打ち方は、ネットの下を通すように転がしながらプレイします。このように、視覚障がいのある方が音を聞いて楽しむことが出来るスポーツがSTTです。ここで重要なのが審判です。STTでは視覚障がいの有無

に関わらず、アイマスクを着用するのがルールです。そのため、競技をする人は音のみが頼りになります。審判は、どのようなプレイでどちらに得点が入ったのか細かく説明しながら試合を進めていきます。その審判には、主審と副審があり、主審が判断しにくかったところを副審が判断するなど二人で協力しながら試合を進めていきます。私たちがずくずくの活動では、この主審と副審のほかに、ボールパーソンも行います。ボールパーソンは、視覚障がいのある方をコート内のベンチや、卓球台に移動するときに一緒に歩いて、どこに座ればよいのか、どこがコートの肩やひじに触れながら一緒に歩き、案内します。これらの活動は、障がいのある方と触れ合いながら楽しく参加することが出来ます。普段の練習から大きな大会まで審判をするため、自分の成長が感じられることが良さです。また、障がいのある方と触れ合うことで、将来に活かすことができるのもSTTの良さです。これから後輩につなげていきたい活動の一つです。

二つ目はキャンブボランティアです。こちらのボランティアはNPO法人セカンドベンギンさん主催の園児から小中学生までを対象としたボランティアです。サークルとして今年から活動し始めたボランティアですが、すでに多くの部員が参加しており、普段子どもと関わる機会が少ない教育学部以外の学生も参加し、たくさん貴重な体験をさせていただいております。例えば、子どもと関わることの面白さ、難しさというのは実際に関わってみないとわからないことでしょう。私の実体験ですが、自分がついた班の子ども同士が全六日間のキャンブの日数を重ねるうちに手を繋ぐのも嫌だというぐらいに仲が悪くなってしまうしました。私は最初見て見ぬふりをしようと思いましたが、現役教員を含む先輩スタッフ達からの問いかけから自分がこの状況をどうにかしたいと本音では思っていると気付かされました。そこからは先輩スタッフに支えられ、アドバイスをもらいながら試行錯誤を繰り返して、私が特に指示せずとも二人きりで作業する仲になることが出来ました。二人とも自分を曲げない意思が強い子達だったので、この六日間お互いを受け入れ、認め合えるように成長できたのだと感じました。このときの体験は私にとって決して忘れられないものであるし、私を人として前進させたものであったと考えています。このように子どもや経験豊富な先輩スタッフと関わることで普段の大学生生活では得ることのできないよ



うな貴重な体験やそして人としての成長をすることが出来ます。また、子どもたちも無邪気に楽しそうに活動するので自分たちにかつてあった、忘れていたなにかを感じる事が出来ます。経験も積める上に楽しいボランティアなので継続して参加していきたいと考えています。

〈まとめ〉

最後になりますが、日頃からずくずくをご支援いただき、誠にありがとうございます。これからも活動の幅を増やし、日々精進してまいりますので、ご支援のほどよろしくお願い致します。



未来の子どもたちへ愛よ届け



カトラッチャ珈琲
今井 英里
(平二五卒)

伊予市双海町の海沿いでカトラッチャ珈琲焙煎所というコーヒー豆屋を営んでいます、今井英里と申します。私は中学時代、駅伝部に所属しまして三年生の大会で後輩に成績を抜かれ大会に出場することが叶いませんでした。三年間、曲がりなりにも努力してきたのに出場もできないなんて、努力が水の泡と化したように思い、悔しくて涙していました。ところが、顧問の先生に言われました。「今井が頑張ってきたから後輩が育ったんだ」と。その真偽はさておき、私はその一言で努力が報われたように感じました。そして私も誰かに良い影響を与えられる言葉をかけられる大人になりたいと、愛媛大学教育学部に入學しました。



コーヒー生産者とともに

の中には精神的な障がいを抱えていた子がいました。その子に寄り添おうと当時の私は懸命に努力しましたが、どんな言葉をかければ、どんな関わりをすれば良いのかわからず、人間としての器の小ささ、経験値の低さを痛感して実習を終えました。

大学を卒業してすぐにホンジュラスという中米の国へ派遣されました。活動内容は現地の教員を対象とした算数の指導。私は教育心理学専修でしたので、現地で技術移転ができるように大学の間に地域の小学校の算数の授業にアシスタントに入りできる限り経験を積みました。派遣前には七十日間の訓練を受け、スペイン語で算数の授業がひとつできるくらいになって派遣です。



ゴミ拾いをする子

す。その時間に逢えてよかったと思える大人になりたいと、日本で教員になる前に、自分の器を上げようと青年海外協力隊に応募しました。

での未熟な若者でしかないということでした。加え、ホンジュラスの人たちから見れば私は外国人。拙いスペイン語で見た目以上に幼い子どものように見えていたことでしょう。

ぎこちない雰囲気の出任当初、見學した授業は二年生のかけ算の授業でした。教卓で先生が子どもたちに言います。「ゼロの段から言いましょう」「 $0 \times 1 = 1$ 」「 $0 \times 2 = 2$ 」「 $0 \times 3 = 3$ 」……スペイン語力の低い当時の私でも教卓で誤った知識を教えていることがわかりました。そして、授業終わり、先生に「 $0 \times 1 = 0$ 」「 $0 \times 2 = 0$ 」だという事実と伝えました。想像通り、先生は怪訝そうに私を見るだけで聞いてはくれませんでした。この世には正しさよりも大切なことがあります。先生自身は学校で教えられたことを同じ通り子どもたちに伝え、それを何十年も続けていて、それが先生にとつての正解なのです。突然日常に入ってきた異国の者に「それは違います」なんて言われても、簡単には受け入れられやしないでしょう。

なので私は、自分が指導する立場であるというスタンスを手放し、算数を学ぶ意欲のある先生の

チーム作りに勤しむことにしました。学ぶ意欲がある人には年齢や言葉の違いなんて関係ないものです。チームに算数の知識を伝授し、チームが現地の教員を対象に算数研修会を定期開催。蜘蛛の巣のように知識を共有できるシステムを導入しました。



算数研修会

その後、信頼関係もできてくると、教員から「保護者が家庭で勉強を手伝わないから、子どもの学力が伸びない」という声が挙がり、算数参観日を開催しました。参観日自体が初めてだった先生たちは、俄然成功させたい気持ちが強いため、私とマンツーマン体制で指導案を作り、教材を作り、模擬授業を行い、授業に挑みました。子どもからは「勉強しても計算が早くならない」という声が挙



算数オリンピック

がり、毎日の時間割にドリルの時間を取り入れ、毎日ドリルを徹底して継続しました。ドリルを導入して三ヶ月ほど経つと、先生から「計算が早くなったから、誰が一番早いかに競い合わせたい」という声が挙がり、算数オリンピックを学校行事として開催するようになった。



算数参観日

りました。

二年間、私は現地の教員と足並みを合わせることを意識して取り組みました。私にとっては括られた二年間ですが、現地の先生からすれば何十年という月日の中の二年間でしかありません。二年しかない焦つても、焦っているのは私だけ、それでは物事はうまく回りません。大切なものは、目の前にあるものだと私はこの二年間で思いました。焦ることなく、目の前の人を見れば、その瞬間に何が必要なのか、何をすれば効果的に効果的なのかが示されるのです。そしてそれは、自分が何ができるかを自問し続けることにつながっていると感じます。目の前に自分がすべきことがあると、私は二年間のホンジュラス活動で思いました。

二年間の活動を経て「算数が楽しくなった。ありがとう」とたくさん先生の先生や子どもたちに言ってもらえて達成感を感じたのですが、私にはどうしても目を逸らせられない存在が目の中にありました。それは貧困層の子どもたちでした。朝から晩まで歩いて、ゴミを拾い集める子ども、市場で大人に混じって売り子をする子ども、売春している小さな子ども、その

現状を目の当たりにして、できることを探しましたが、ボランティアの身である私には権力もお金も無く、ただついて回り、彼らの生活を知ることでも精一杯でした。苦しんでいる声にも助けてという言葉にも、何の手助けができる業がありません。それをとんでも無力に感じ、家に帰っては悔しさに涙を流しました。

そして、ホンジュラスの子どもたちのために自分ができることを考え抜いた末、コーヒー豆を直接輸入してお金を現地へ送る活動に至りました。二〇一六年、七百キロという量の輸入に始まり、二〇二四年現在の輸入量は年間七トンまで上りました。一千万円以上の送金をしています。それは私だけの力ではなく、この活動に共感してくださっているお客さま方のお力添えの賜物です。一人一人の力は小さなものかもしれませんが、集うと大きな力になるものだと私は今の仕事で痛感しています。

また、共感者はお客さんだけでなく、店にはパティシエの仲間が増えました。今年、ホンジュラスからカカオ豆を輸入し、チョコレート販売事業をスタートしました。そして、二〇二五年にはアー

ティストの寺尾紗穂さんと共にホンジュラスへ渡航し、現地の国立劇場で国立吹奏楽団と共にコンサートを開催します。劇場には六百人の来場を見込んでおり、現地の子どもたちのため、学校修繕の募金活動をする予定です。山岳地帯の学校から学校修繕の協力要請が日本のカトラッチャ宛に届いたのです。個人の力ではどうしようもできない、遠い、氷山の一角でしかない、関係がない、「できない言い訳」は山ほど出てくるものですが、私は目の前の物事から顔を背けることができません。故に、どこまでできるかわかりませんが、国立劇場で募金活動を始めて、現地の教育問題をホンジュラス人と共に考えたいと思います。私は、日本の教卓に立つことは現在考えていませんが、コーヒー・カカオ・音楽、あらゆる世界を通じて、子どもたちのためにできることを人として考えていければと思っています。寺尾紗穂さんは、二〇二五年の十月に開催予定のカトラッチャ主催の松山コンサートに歌いに来てくださる予定です。彼女の目を通して見たホンジュラスを聞きにいらしていただければ幸いです。またホンジュラスチャリティコンサートに関してクラウ

ドファンディングも行い、想いをページに書き連ねていますので、ご興味ありましたら、そちらもご覧いただけると嬉しいです。



先生たちと



会員の声



大拙・英訳「教行信証」の研究(一)

吉原 宏文
(昭四二卒)

opus)「教行信証」は、鈴木大拙博士によって、混迷する世界情勢に、説得力があり、魅惑的なものであるとする決断力に駆り立てられるのである。斯して、日本・浄土真宗」の開祖・親鸞聖人は、世界の光、人類の光となるのである。

(I) 顕浄土真実教行証文類(序)

被爆は免れたが、いわゆる放射能を含んだ「黒い雨」を浴びた。その影響か、子ども時代から身体が弱く、無理の効かない人生だった。それにしても、八十二歳の今日まで生き伸びたことは全く不思議である。併し、白内障を煩い、両眼の手術を受けたことで、被爆手帳を交付された。昨年、G7広島サミットが開催されたことが縁で、最近、市内に外国人観光客が激増したことは、核問題についての関心の深まりと思われる。

さて、年二回発行される同窓会報に拙文を投稿し、大拙・英訳「教行信証」序論の研究が完了し、大きな満足感を獲ることができた。親鸞聖人の主著(magnum

たことを黙認された。即ち、釈尊は、韋提希(Śāradī)夫人の心が、平和と幸福の国土(浄土)に向けられるように、この娑婆世界に出現された。これは、浄土教を理解し、信じる心の準備が調った人達を今ここに紹介されているのである。^①

こうして、我々は、人間の姿をしたこれらの存在(権化の仁)の情け深い精神は、一切衆生をその悲惨と苦悩の生活から救済することを目指すのです。また、世界の勇者(世雄)の思いやりの深い心は、極悪非道の犯罪者(五逆)②、正法を冒瀆する者(誹謗正法)、功德の蓄えの断片もない人(icchantika・一闍提)にさえ救いの手を差し伸べられるのです。

従って、心すべきです。過不及なく十分に調い(円融)、この上ない最高の功德(至徳)を体現している幸運な愛でたい名前(嘉号)は、悪を善に転換する卓越した知識であります。考えも及ばない(難信)、ダイヤモンドのように堅い(金剛・vajra)の信楽は、疑い深い想念を消滅さ

せ、我々を証に導く真理です。故に、この教えは、心が狭く無能な我々誰れもが、容易に実践できる真実の教えです。そして、愚かで鈍い我々が目標に向って歩いて行くのに最も近い道路(捷徑)です。偉大な聖者(大聖一代)のこの教えに匹敵するものは何もありません。本当に、功德の海です。不浄(穢)を捨て去り、清浄を切望している人達がいます。正しい実践(正行)と正しい信仰(信心)に迷っている人達がいます。心が昏く理解力に欠けている人達がいます。悪行に悩み、その上に妨害が重く押し掛けている人達がいます。然り、このような人達こそが、如来(釈尊)の「早く浄土に來たれという呼び声」(発遣)を求めて心を配ることが願われています。そして、必ず、この素晴らしい真理の道(最勝の直道)に身を捧げることが願われています。そして、この実践と信心のみを快諾されんことを……

ああ、人間が輪廻転生して、どれほど多くの生涯を体験しようとも、阿弥陀如来の普遍的救済の祈願に助けられて幸せな境遇に安堵

二〇二四年(令和六年)十月十一日(金)、ビッグニュースが飛び込んできた。即ち、今年度のノーベル平和賞に「日本被団協」が受賞したのである。関係者の歓喜の様子がテレビに映った。唯一の被爆国である日本、広島・長崎の被爆者達の核兵器(原水爆弾)廃絶を目指す、長年の地道な活動が評価されたことは、今後の活躍に一層拍車がかかった。併し、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルとガザ地区の紛争、また、北朝鮮の不穏な動向等、皆、核兵器を脅し文句にしている。

私が三歳のとき、広島市に原爆が投下された。我一家は、県の山中に住んでいたので、直接の

している自分を発見することは稀なこと（弘誓の強縁、多生にも値ひがたく）です。真理への純粹な信心によって救い取られることは、無限ともいえる、どれほど長い時間（kalpa・劫）を生きようとも、最も困難な事（真実の浄信、億劫にも獲がたし）です。従って、過去世における最も好都合な業（karmān）の結合（因果律）なくして、どうして浄土の信心とそこに生きることができのでしょうか？（偶々行信を獲ば遠く宿縁を慶べ。）若しまた、疑いの網（vei）によって心が曇り、この絶好機を逸するならば、彼には、虚しくも、更にもう一つの無限の長時（kalpa・劫）の流転が待ち受けている（このたび、疑網に覆蔽せられ、かえってまた曠劫を経歴せん）です。誰れであれ皆、がっちり抱き上げられ、誰れ一人として後に取り残されることはないという声明（撰取不捨の真言）、そして、この世の全てのものを超越した驚くべき正法（超世希有の正法）を聞き思案することに躊躇してはなりません（聞思して遲慮することなか

れ。）

今ここに、私、釈の親鸞、年老いて純真で無学な私は、インド、中央アジアから来た聖なる經典、そして、中国と日本の教師達による解説書とに偶然に遇えたことは、何という幸せなことでありましょう。これらの聖典に触れる権利を持つことは大変難しいことですが、今それを手にしています。その教訓（message）を聞くことは非常に稀なことですが、既に聞きました。私が浄土真宗のこの教訓に生き、それを悟ることは、深い深い如来の恩徳によるものでありましょう。こうして私は聞いたことを慶び、獲たことの全てを心の奥に抱いて感嘆しているのです。

（明静庵主）

註① 頻婆娑羅王勅セシメ宿因ソノ期ヲマタズシテ仙人殺害ノムクヒニハ七重ノ台ニトゲラレキ。阿闍世王ハ瞋怒シテ我母是賊トシメシテゾ無道ニ母ヲ害セントツルギヲヌキテムカヒケル。恩徳廣大釈迦如来韋提夫人ニ勅シテゾ光臺

現国ノソノナカニ安樂世界

ヲエラバシム（觀經和讃）

註② 五逆（一、殺父・二、殺母・三、殺阿羅漢・四、出

仏身血・五、破和合僧）

二〇二四年（令和六年）

十一月三日（日）文化の日

（〒731-0135 広島市安佐南区長束一丁目十八ー五一五）



表紙の作品



富田 礼志
（昭四七卒）

「楠空拭き漆盆」

材料・楠空

サイズ…径一六・五cm、高四cm

制作年…一九九五年

今から四十年前程前、近くの神社にあった楠の古木に雷が落ち、根元にあった洞が燃え、切り倒すことになった。それを大分市内の材木屋が買い取り、僕がたまたまその材木屋を訪ねて、空の美しさに気付き一部を購入した。木工室の轆轤を使って挽きあげ、拭き漆で仕上げた作品である。

僕は愛大の美術科で油絵を学び、卒業後は二科展に出品していた。しかしある時、絵は自分には向いてない、描くのが苦しいのは合っていないからだと思った。当時在籍していた芸大の木工専門の教授に頼み、木工の基礎を教えてもらい、木工作品の制作に転換した。

先輩を偲ぶ

あしあと (12)

先輩たちのあしあと

(教育学部同窓会百周年記念誌より原文のまま抜粋)



ダルトンプランと愛師附小

愛媛県師範学校

山本 福松氏寄稿

(大正八卒)

ダルトンプランは、第一次世界大戦終局のころ、米国マサチューセッツ州ダルトン市で、パークスト女史が提唱し実施した学習指導の方法で、我が国へも紹介され、愛媛師範にゆかりの深い赤井米吉先生などは此のプランの熱心な紹介者で著書も出されたほどでありました。

当時の日本はいわゆる大正デモクラシーの波が押し寄せたころで、一般の思想界はもちろん、政治経済をはじめ教育界も革新の気風が起こり、現玉川学園の小原国芳先生の全人教育をはじめ、稲毛詛風先生の創造教育、千葉師範の

自由教育などのいわゆる八大教育学説の提唱など、理論や実践の場で教育革新運動のくりひろげられた時代でありました。

当時わが愛媛師範学校校長は天下の大物山路一遊先生、附属小は松山隆先生を主事とし、その下には清水亀九治(愛媛師範・明治44年卒)・溝垣音治(同上)・大野静(大正2年卒)・大高義一(大正5年卒)・石村寛逸(大正6年卒)・宮本春吉(大正7年卒)・谷岡白貞(大正8年卒)・末席の小生(大正8年卒)と裁縫の黒田マツ先生の顔ぶれでした。

山路先生については申し上げるまでもありませんが、主事の松山隆先生は、千葉県野田市の御出身で、後年千葉師範の教頭在職中郷土の要請もだし難く、野田市の一小学校長として生涯を捧げられた方(野田市の小学校庭に松山先生

を偲ぶ記念碑が建立されている)

で、そのころは広島高師の徳育専攻科(後の文理大)を卒業後、山路校長に迎えられて附属主事に就任されたのでありました。人格識見共にすぐれた名主事として校内外に信望の厚い方でありました。当時の教育革新運動を受け止めて、どうして我が附属小の教育実践の上にこれを具現し、その成果を上げるべきか、これが主事生活の一大テーマであったようであります。けっきょく主事を中心に職員一丸となり研究協議を重ねた末、ダルトンプランの実践導入となったのであります。大正十二年四月から開始と決まり、小学一・二年は従来のままとし、小学三年以上高小二年までの学年に算・国・地・歴・理の五教科の学習をダルトンプラン方式の学習に切り替えたのであります。

しかし、此のことは並み大抵の業ではありません。実施教科の学習専用室を作り、専用教室に必要な参考資料や参考書を集めることをはじめ、各教科学習の手引きを作成する等多忙な日々でありました。なにぶん、従前の教師中心の教授から、児童中心の学習への転換、一せい指導から個別指導へ、他律他動の教育から自学自習の学習となるのですから。教師も児童もその切り換えの苦労は大変なものでありました。

私はここでダルトンプランの詳細を紹介するのが目的ではないので、その実状の詳細は省略しますが、この研究は数年つづき、その間その実状を公開したり、研究の成果を公表したりして広く世の批判を求めています。賛否さまざまな反響や話題を呼び、大正十三年四月二十六日、松山高等学校のパークスト女史の講演会は一、〇〇〇名を超える盛況でした。

愛媛同窓会百年の歴史は多種多彩多くの事がらが綴られたことと思いますが、その歩みの中に、愛師附小でダルトンプランと取り組み、教育革新に情熱を燃やした一こまのあった事は終生忘れることのできない思い出であります。そのころの教育界は、教育国家百年の大計とし、次代の国民を養成する責任は極めて重且つ大であると、教育者はこの使命に献身する聖職と自負し、ベスタロッチやフレイベルを景仰し、松蔭や淡窓先生を思慕する風潮であったので、今ごろのように文部大臣を向うに回し、教育問題で四つに取り組んだり、スト権奪還とか勤評反対などでストを決行するようなことはありませんでした。いわんや特定の政党を支持して革命を意図するようなことはありませんでした。多くの教育者は天真無垢の子どもを全人として育成する聖なる仕事と信じ、プライドと生きがい

を感じていました。今ごろと比べて、どちらが正しく、本物であるのかいろいろ論議の分かれる所でしょう。後世の歴史家の判断を待つ外はないかもわかりません。

しかし山路校長や松山主事、並びに当時の附小職員の先輩各位が教育のため、学習改革のため、一身一個の利害を忘れ、右顧左顧することなく、一丸となって情熱を燃やし精進を続けた一事は、確かに崇高な教師の姿であったと、今でも忘れる事のできない思い出であります。(当時の物故諸先生を偲びつゝ)

思い出

愛媛県実業補習学校教員養成所

佐藤

真氏寄稿

(昭和一〇卒)

同窓会員の皆様お変わりありませんか、母校の創立百周年、まことにめでとうございます。

私は青師卒と言っても、私が入学し卒業した学校は、青年師範学校の前々身校で、愛媛県実業補習学校教員養成所といって、当時の愛媛県立松山農業学校(後に松山農科大学、さらに愛大農学部に移格)に併設されていた。教授の先生方は、松山農業学校・愛媛県師範学校・愛媛県庁の先生方であつた。学校は隔年募集で、卒業の年

に新入生が入学するようになっていたので、私たち二年間の在学中には上級生がいなかった。寄宿舎に入ることも下宿することも自由で、同級生の年令もまちまちで妻帯している同級生もあった。いたって自由な学園であった。同級生はわずか一九名で、中には小学校訓導を休職して入学していた方もあった。現在私が知っている健在な方には、清水（考）・宇都宮・松本（心）・鎌田・芝・柳原・森井・大谷、で私を入れて九名である。佐伯・新山・星加、は戦死、松本（勉）・村上（安）は退職後死去、佐藤（健）・野口・松本（秀）・首藤と、残り一名は思い出せない、また健在かどうか不明である。

私どもの学校の帽章が郵便局の集配人のそれと似ていたので、ときには登下校の際に郵便局員とまちがわれて苦笑したこともあった。同級生のことを松山農業学校の生徒からは、「養成所のおじさん」と呼ばれて親しまれたものである。その外、教育実習のことや、夏休みに級友と共に松山から汽車、上灘（当時予讃線は上灘までしか線路がない）から徒歩で郷里東宇和郡まで二日ばかりで帰ったこともあり、思い出は尽きない。私は昭和一〇年三月着任以来、勤続三十九年目の、昭和四九年四月一日付けで、八幡浜市立神山小学校長を退職して二年目になる。勤

務地も北宇和郡・東宇和郡・喜多郡・大洲市・八幡浜市であったが、戦前・戦中・戦後を通じて思い出は深いものがある。昭和四五年に高血圧症、動脈硬化症を併発するまで健康には自信があった。自信があり過ぎて無理な勤務を続けたことを今は深く反省している。いま思うことは、人間何と言っても健康第一ということである。現職にある諸兄姉に訴えたいことは、「元気にまかせて無理をせず、健康管理に留意して勤められたい」ということである。

愛大教育学部長の年頭のあいさつに述べておられるとおり、教師の仕事は、子供の持つっている豊富な無限の可能性をひき出すことである。より高次な教師という専門職にふさわしい教養と実力を身につけるために、日々に新たに努力精進を続けねばならないと思う。未解決な困難ではあるが、やりがいのある教師の道、現職の諸兄姉のご奮発を願ひ、ご壮健を祈つてやまない。

出会いを大切に

愛媛大学教育学部

松田 建雄氏寄稿

（昭和二八年）

人と人との巡り会いは、寄せても返す波のようだという。私も、

この世に生をうけて四〇数年、これまでどれだけ多くの人々に巡り会うことができたことだろう。考えてみても想像もつかないほど多くの人の感化をうけ、現在にいたっているわけである。人との巡り会いは現実の人だけとは限らない。書物によって、遠い昔の人々の心に接することもできる。

私は、学生時代、J・Hペスタロッチの書に接したことがある。それ以来、ずっと彼に敬慕の念を抱いている。小学校のころ、職員室の正面に、彼の肖像画が掲げられていたことを思い出す。チューリッヒに生まれた彼は、神学を学び、ついで法律を修め、また、農場の経営などをしたがいずれも失敗した。後に、教育の改革に志し、二九歳の時から八三歳でこの世を去るまで、教育の事業に心身を捧げたのである。

彼の生誕百年祭の時、スイスの一閑村、ビルに眠る彼のために献じた墓標には、次のような碑銘が残されている。

「ノイホーフにては、貧民の救助者、

リンハルトとゲルトルトにては、

人民の指導者

シュタンツにては、孤児の父

ブルグドルフ及びミュンヘンブ

フゼーにては、

小学校の創設者

イベルドウンにては、人類の教育者

人間にしてキリスト教者、

また、市民なりき。

すべてを他人のために傾け尽くして、自らのためには何事をもせざりき。その人の名に祝福あれ」

私は、この最後のことばに大変感銘を愛けている。このことは、彼の人間性を端的に表現していることばであると思う。そして、現実の人間としては近寄りがたいことであろう。しかし、教育の道に志した者にとっては、一歩でも近づきたい哲理である。私も、夜床についた時一日のことをあれこれと思い出してみる。今日という日を精一ぱい生き抜くことができただか、一人でも多くの子供たちに、より多く喜んでもらえるだけのことをなしたか、と、自問してみるのである。

まことに、ペスタロッチは私たちの師であり、父である。彼は、人を愛する心が深く、「真に人を愛する道は、よくこれを教育するにあり。」とも説いている。彼の事業が、しばしば失敗に終わりがらも、長く人々の尊敬を受けているのはその純情のためであろう。最近、洋行する者も多くなってきた。もし、私もその機を得ることができれば、まず、立ち寄ってみたいところの一つである。

いま、私は松前の子どもを受けもっているが、この地は、義理、人情にあつい所である。これも、享保の飢きんの時、ペスタロッチ同様、自己を顧みることなく、人々のために尽くした義農精神に基づくものと思う。松前の子は、いっぱんに言動が粗野で、衝動的であるといわれるが、私は、こういう「松前っ子」が好きである。そして、彼等との出会いに誇りを感じ、お互いに矯正し合い、末長く語り合っていきたいと念じている。

人と人との出会いを大切に、

「わが腹を、割ってみせたい西瓜かな。」

のように、魂と魂の触れ合う中で、この道に精進したい。豊かな人間性を育てるための日々の営みは、子供の味方となって、彼等の内心に触れてやり、理解し合い、信頼することからはじまるものと思う。子供に対し、自然的で、純真、素直な言葉が彼等を感じさせるものと考えて。最大の苦しみと最高の喜びを味わえる学校でこそ、教師としての生きがいを感じることがのできるのである。本校における教育のやりがいも、このあたりにあると信じている。





愛媛大学教育学部同窓会からのお知らせ

愛媛大学教育学部同窓会報投稿に関するお願い

愛媛大学教育学部同窓会事業の一つに「教育学部同窓会報」の発行があります。会員相互の親睦向上を図るために多くの会員の方に投稿していただきたく、以下のことにご協力のほどお願い申し上げます。

【投稿について】

会報への投稿は、事務局から依頼する「依頼投稿」と会員の方が直接事務局に投稿する「自由投稿」があります。

1 「依頼投稿」

依頼投稿は、基本としましては現職会員を対象として事務局から各支部長を通して依頼します。また、会員の参考となる教育実践及び活動等については、編集委員会の承認を受けて直接会員・準会員に依頼することもあります。

2 「自由投稿」

自由投稿は、会員（同窓会会則参照）であれば誰でも投稿できますが、会報ページ数調整のため事前に事務局への掲載希望の連絡が必要です。

【自由投稿について】

1 自由投稿のジャンル

自由投稿のジャンルは特に定めていませんが、以下のことをご参照ください。

- ① 愛媛大学教育学部の歴史的背景、重要性に関する内容であること。
- ② 愛媛大学、愛媛大学教育学部の広報活動や最新情報及び教育学部同窓会を紹介する内容であること。
- ③ 会員の日々の教育活動に関することで今後の実践への示唆を示す内容であること。
- ④ 会員の日々の生活、趣味活動（絵画、俳句、写真等）、同期会、同級会に関する内容であること。
- ⑤ 会員の個人調査・研究によるもので幅広く社会に展望する内容であること。
- ⑥ その他、編集委員会で協議され承認を受けた内容であること。

2 投稿の条件

- ① 公平性を確保するため自由投稿は各会員年度内1回とし、基本連続掲載は認めないものとします。ただし、編集委員会が認めた内容については連続掲載を可とする場合があります。
- ② 投稿希望者が多数の場合は、新規希望者及び掲載数の少ない希望者を優先します。
- ③ ページ数に余裕のない場合は掲載できないことがあります。その後の掲載の可否については編集委員会で決定します。

3 掲載手続等の遵守

- ① 投稿希望者は、事前に事務局（編集委員会）に掲載希望と大まかな内容（ページ数含）を知らせてください。掲載希望受付後は編集委員会で協議検討し、掲載の可否及び執筆要領を連絡します。
- ② 原稿締切は必ず厳守してください。承認を受けた原稿でも締切後の提出は掲載できない場合があります。
- ③ 1次校正は、必ず執筆者と編集委員会が行いますが、2次校正以降は事務局（編集委員会）に一任していただきます。

4 責任及び著作権について

- ① 会報掲載後の著作権については、「愛媛大学教育学部同窓会」が所有するものとします。ただし、掲載内容に関することは執筆者の責任で対応していただきます。

会員の皆様の投稿をお待ちしています。

愛媛大学教育学部同窓会 編集委員会

敬 弔

(物故会員)

6・6・26	6・6・20	6・6・18	6・6・2	6・5・31	6・5・29	6・5・10	6・5・6	6・4・22	6・3・26	6・3・12	6・3・7	6・2・4	5・6・28	4・11・16	(死亡年月日)
(昭27・愛大)	(昭35・愛大)	(昭33・愛大)	(昭28・愛大)	(昭25・愛大)	(昭40・愛大)	(昭27・愛大)	(昭32・愛大)	(昭38・愛大)	(昭26・愛大)	(昭28・愛大)	(昭22・愛大)	(昭26・愛大)	(昭30・愛大)	別宮 達也	(氏 名)
毛利 運衛	豊田 量見	菊川 國夫	景浦 憲一	赤松 豊	増池 武雄	村上 道男	戒能 申脩	野寄 全昭	伏見 和代	藤本 満	川口 明美	岡原 一隆	高月 守	別宮 達也	(死亡年月日)
6・12・8	6・12・5	6・11・20	6・10・29	6・10・13	6・10・11	6・9・26	6・9・16	6・9・10	6・8・29	6・8・14	6・8・11	6・7・29	6・7・4	6・7・4	(死亡年月日)
(昭23・青師)	宇都宮和市	(昭42・愛大)	(昭30・愛大)	西川 弘志	(昭37・愛大)	井手窪 理	(昭32・愛大)	森 良輔	織田 淑子	(昭26・愛大)	後藤 瞳子	(昭24・愛大)	宇都宮哲男	(昭19・愛大)	(氏 名)
宇都宮和市	永井 吉彦	(昭42・愛大)	(昭30・愛大)	西川 弘志	(昭37・愛大)	井手窪 理	(昭32・愛大)	森 良輔	織田 淑子	(昭26・愛大)	後藤 瞳子	(昭24・愛大)	宇都宮哲男	(昭19・愛大)	(氏 名)
宇都宮和市	永井 吉彦	(昭42・愛大)	(昭30・愛大)	西川 弘志	(昭37・愛大)	井手窪 理	(昭32・愛大)	森 良輔	織田 淑子	(昭26・愛大)	後藤 瞳子	(昭24・愛大)	宇都宮哲男	(昭19・愛大)	(氏 名)

寄 付 者 名

令和六年七月
令和七年一月

藤 原 宏 幸 様
吉 原 宏 文 様

※ 同窓会へのご寄付ありがとうございます。



放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では二〇二五年四月入学生を募集中です。

〔募集期間〕

二〇二四年十一月二十六日(火)
～二〇二五年三月十一日(火)

放送大学はインターネットやテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用して、専修免許状の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、特別支援学校教諭免許状の取得が可能です。

放送大学

教養はエネルギーだ。

一科目からでも学べます

2025年度4月入学生募集中!

(2025年3月11日まで)

問合せ先 愛媛学習センター

TEL 089-923-8544

●インターネットで資料請求・出願できます。 ●資料請求専用フリーダイヤル
放送大学 www.ouj.ac.jp 0120-864-600



会員写真館

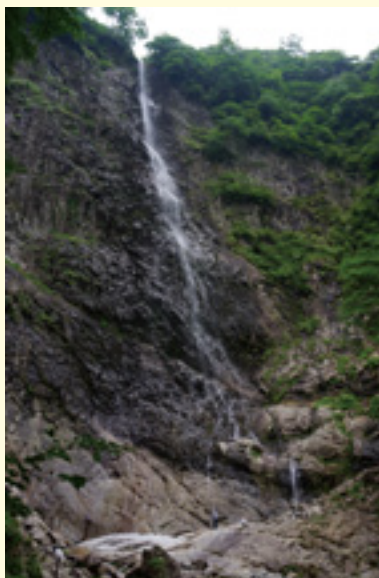
今回は石鎚山系にある滝と風景を選んでみました。

高瀑の滝は、落差が132メートル近くあり、四国最大の滝と言われています。

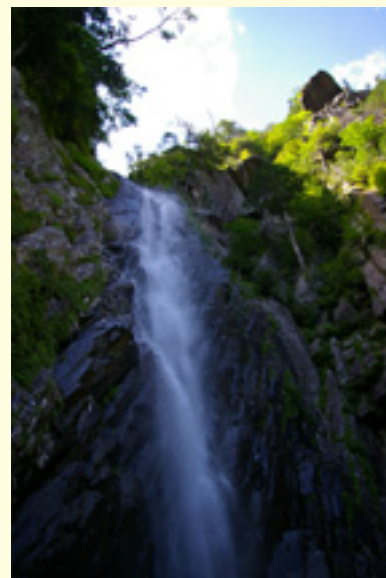
御来光の滝は、落差が102メートル近くあり、三大到達困難な滝に選ばれています。

笹倉湿原は、神の庭と形容された幻の湿原と言われ、ウマスギゴケが絨毯のように一面生えています。

石鎚南尖峰は、通称「墓場尾根」と言われ見応えがあります。



高瀑の滝



御来光の滝



笹倉湿原（さぞうしつげん）



石鎚南尖峰

写真提供（教職員OB：近藤 喬）

文芸欄

幸田光温先生が教壇に立ちながら描かれた絵画から再度選ばせていただきました。

引用『絵画・俳句・短歌・郷土研究……』

教師 幸田光温 七十八年のあしあと』 より



三次巴橋付近（淡彩）



水田の風景（パステル）



モデル嬢（水彩）